

佐賀大学国際交流推進センター 令和元年度 年次報告書

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University April 2019- March 2020



ANNUAL REPORTS

目 次

I. 国際交流ネットワーク	2
1. 学術交流協定	2
2. 海外ネットワークの構築と情報発信	2
2.1 佐賀大学海外版ホームカミングデー in クアラルンプール	
2.2 佐賀大学プロモーション in クアラルンプール・バトゥパハ	
3. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動	8
II. 学生交流	10
1. 留学生受入れ	10
1.1 留学生受入れの概況	
1.2 佐賀大学短期留学プログラム (SPACE)	
1.2.1 SPACE-E 実施報告	
1.2.2 SPACE-J 実施報告	
1.2.3 SPACE-ARITA 実施報告	
1.3 令和元年度日本語・日本文化研修コース	
1.4 令和元年度日本語研修コース	
1.5 香港中文大学学生交流プログラム (短期受入れ)	
1.6 留学生交流支援事業	
1.6.1 短期留学生受入支援事業	
1.6.2 特別聴講学生・特別研究学生等 学習奨励費支援事業	
2. 学生の海外派遣	31
2.1 本学学生の海外派遣概況	
2.2 交換留学生の派遣	
2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣	
2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)	
2.5 学生の海外派遣支援 (国際化支援制度)	
3. キャンパスの国際化	45
III. 研究者交流	47
令和元年度佐賀大学国際研究者交流事業	47
IV. 地域国際連携	57
1. 世界とともに発展する SAGAN グローバル人材育成事業	57
2. 佐賀県立武雄高校との交流	59
3. 佐賀地域留学生等交流推進協議会の取組	60
V. その他住環境整備等	63
1. 佐賀大学国際交流会館	63
2. その他の住環境支援	63

I. 国際交流ネットワーク

1. 学術交流協定

平成31年1月に「佐賀大学学術交流協定取扱要項」を策定したことにより、学部間・大学間協定のいずれについても明確な基準と手続きに従って海外の高等教育機関と協定を締結することができるようになった。また平成31年度に着手した海外協定校との交流状況調査の結果を踏まえ、窓口教員の退職・移動等により交流が途絶え活発な交流が見込めない協定や、留学生の派遣と受入の交換数にインバランスが生じている協定の見直しを行った。協定校との意見交換を経て、新たな取り組みを検討したり、改善が見込めない協定については両者合意の上で廃止とした。令和2年3月末現在、本学は19か国・地域の73大学と学術交流協定を締結している。

【新規協定校】

スラバヤ工科大学（インドネシア） 国立大学・2019年5月21日締結
国立勤益大学（台湾） 国立大学・2019年6月28日締結
ベトナム国家大学ハノイ校経済大学（ベトナム） 国立大学・2019年8月24日締結

2. 海外ネットワークの構築と情報発信

海外ネットワークを構築・強化・掘り起すための一つの取り組みとして、佐賀大学海外版ホームカミングデーを毎年度実施している。今年度はマレーシア・クアラルンプールにおいて「佐賀大学海外版ホームカミングデー」を以下のとおり開催した。

	開催日	開催国	都市名
第1回	平成24年3月5日	ベトナム	ハノイ
第2回	平成24年9月10日	中国	杭州
第3回	平成25年8月22日	韓国	ソウル
第4回	平成27年3月10日	スリランカ	キャンディー
第5回	平成27年9月16日	インドネシア	ジョグ・ジャカルタ
第6回	平成28年2月6日	タイ	バンコク
第7回	平成29年2月11日	ベトナム	ハノイ
第8回	平成29年12月9日	中国	北京
第9回	平成31年2月16日	インドネシア	ジャカルタ
第10回	令和元年12月14日	マレーシア	クアラルンプール

2.1 佐賀大学海外版ホームカミングデー in クアラルンプール

【日 時】 令和元年12月14日（土）13時30分から15時40分

【場 所】 コーラスホテル クアラルンプール（クアラルンプール市内）

【参加者】 本学出張者（7名）、協定校関係者（6名）、在マレーシア日本関係機関・マレーシア佐賀県人会（6名）、元留学生（41名）、同伴者（30名） 総勢90名

【式次第】

- 司 会 佐賀大学学術研究協力部国際課長 吉田 規雄
- 開会挨拶 佐賀大学理事・副学長 寺本 憲功
- 来賓挨拶 在マレーシア日本国大使館一等書記官 石川仙太郎
- 乾 杯 佐賀大学海洋エネルギー研究センター教授 池上 康之
- 佐賀大学のいまとこれから 佐賀大学国際交流推進センター准教授 山田 直子
- 佐賀大学マレーシア人留学生同窓会発足式
 - 挨拶：同窓会顧問 アブドゥル・サマド・タリブ
 - 挨拶：同窓会会長 アドナン・モハメド・ノール
- 友好特使任命
 - 授与者：佐賀大学理事・副学長 寺本 憲功
 - 友好特使：同窓会顧問 ナザミッド・サアリ
 - 同窓会副会長補佐 ムハンマド・ニザム・ザカリヤ

【概 要】

過日、上記日時・場所において、佐賀大学海外版ホームカミングデーを開催した。海外版ホームカミングデーとは、海外の協定校との連携強化および海外在住の卒業生と関係者とのネットワークの維持・構築を目的とし、平成24年度から年1回以上開催している、いわば、“海外版の同窓会”である。マレーシア国内でのホームカミングデー開催は、今回が初めてであり、また開催10回目という、節目となる‘記念すべき会’となった。

ホームカミングデー当日、寺本理事・副学長をはじめ、マレーシアの協定校と交流を持つ学内教職員、各協定校の役員・教員らのほか、在マレーシア日本国大使館、現地の日本政府・企業関係者や元留学生ら、総勢90名の方々が出席され、これまでで最も参加人数が多い、盛大な会となった。

冒頭、本学を代表して寺本理事・副学長から挨拶があり、①現在、マレーシア国内にはマレーシア工科大学（UTM）、マレーシアプトラ大学（UPM）、マレーシアトゥンフセインオン大学（UTHM）の3校において本学は、学部間協定を締結していること、②互いに教育・研究の国際交流を深めていること、③今後もマレーシアの各大学は本学にとって国際交流の最も重要な拠点であることが述べられ、参加者らの関心を大いに引き寄せた。引き続き、本学海洋エネルギー研究センター・副センター長の池上教授から乾杯の発声があり、現在、当センターが展開している、JST・SATREPS 学術事業について紹介が行われた。その後、ご来賓を代表し、在マレーシア日本国大使館・石川一等書記官から、今回のマレーシアでの本学の海外版ホームカミングデー開催に対する祝辞を賜り、式典に花を添えられた。

また式中、本学で学んだマレーシア人留学生による同窓会発足式も行われ、役員を代表し、顧問・アブドゥル・サマド・タルブ氏および会長・アドナン・モハメド・ノール氏の2名から、マレーシア同窓生らの相互連携を一層、深めていきたい旨のご挨拶を頂いた。今後のマレーシア人留学生同窓会の発展を期待し、寺本理事・副学長から顧問のナザミッド・サアリ氏および副会長補佐のムハンマド・ニザム・ザカリヤ氏の2名に対し、『佐賀大学友好特使』を委嘱した。

最後に出席者全員で記念写真を撮り、別れを惜しみつつ、またの再会を期して閉会した。



式典の様子



佐賀大学マレーシア人留学生同窓会・各役員紹介



集合写真

2.2 佐賀大学プロモーション in クアラルンプール・バトゥパハ

1 マレーシア工科大学 (UTM) 訪問

1) UTM 関係者との意見交換 2月13日 (金) 10:00~11:10

UTM: Ts.NOR ZAIRAH AB RAHIM Assistant Dean ほか

本学: 寺本理事、池上教授、山田准教授、吉田課長、山田 (佳) コーディネーター、木下係員

概要

- ・ UTM の大学紹介では QS ランキングが上昇していることを含め、優れた研究成果や企業や海外機関との連携等について具体的に紹介していただいた。工学大学であるが、人文社会科学の領域も含む総合大学である。
- ・ 現在の研究交流をさらに発展させるため、学生交流を含む協定・覚書を締結する方向性について合意した。
- ・ 海洋温度差エネルギー研究センターを中心として本学の大学院生の受け入れを積極的に行いたいとのこと。
- ・ 学部学生についても、英語による専門教育の実施に加え、留学生を対象とした学術英語の学習機会が提供されていることから、派遣先として優れていることが確認した。(留学生数997人、UTM からの海外派遣数821人)



2) OTEC 研究室等視察

- ・意見交換の後、本学海洋エネルギー研究センターとの間で共同研究を行っている OTEC 研究室を視察し、共同研究の内容等について説明を受けた。



2 帝京マレーシア日本語学院 (PBT) 訪問 2月13日 (金) 12:10~14:00

PBT：清宮衛校長、炭谷憲一教務主任、大野好弘（帝京マレーシア株式会社取締役社長）

本学：寺本理事、山田准教授、吉田課長、山田（佳）コーディネーター、木下係員

概要

- ・帝京マレーシア日本語学院では、渡日前のマレーシア政府派遣留学生に対して2年間の予備教育を実施している。
- ・進路指導の際、帝京大学に入学希望する留学生は無試験で入学させている。関関同立・早慶を希望する留学生には帝京大を併願させないように指導している。
- ・マレーシア政府では、これまでマレーシア政府派遣留学生には奨学金支給終了後に一定の条件を満たさなかった場合には奨学金の返済義務を課していたところであるが、この取り扱いを変更し、今後は返済義務を求めない方針に変更する動きがあると聞いている。
- ・日本の大学の情報については、東京大学の存在程度ぐらい。地方で物価の安価な地域を希望しているため、地方大学を希望する傾向あり。



3 マレーシアプトラ大学 (UPM) 訪問12月13日 (金) 15:00~16:30

1) UPM 関係者との意見交換

UPM : NAZAMID SAARI, Ph.D Dean Faculty of Food Science and Technology ほか

本学 : 寺本理事、辻田講師、山田准教授、吉田課長

概要

- ・平成元年に農学部が協定を締結。現時点の協定は一部の農学領域のみに限定されているため、今後の研究教育交流を活性化するため、関連する分野を網羅した包括的な協定書の作成を試みることを合意した。
- ・日本の大学との交流として、東京農業大学との共同研究、九州工業大学（環境工学）との学生派遣・受け入れ、20名程度の短期留学受け入れなどを行っている。
- ・UPMはモビリティを重視しており、特に2週間程度のプログラムに学生を派遣したいという希望があり、本学がどのような短期研修の機会を提供しているのか質問が出た。さくらサイエンスへの応募を、本学農学部をカウンターパートとして申請希望。



2) 学生向け留学説明会 (15:00~16:00)

上記の意見交換と並行して別の場所で学生を対象とした本学の留学説明会を実施した。

説明者 : 木下係員、山田国際交流推進センターコーディネーター

参加人数 : 30名程度

内容 : 説明資料をもとに佐賀大学の概要、交換留学制度、工学系研究科 PPGA、SIPOP、農学研究科 PPGHD 等について説明した後、質疑応答を行った。



4 マレーシア佐賀県人会との懇談 12月13日 18:30~

本学 : 寺本理事、山田准教授、辻田講師、吉田国際課長、山田 (佳) コーディネーター、木下係員

先方 : マレーシア佐賀県人会会長 大久保靖彦根氏、ほか計6名

- ・マレーシア事情、社会の現状及び今後の日マ関係等について意見交換を行った。

5 ムアール市視察 12月15日 (日)

令和2年3月に派遣留学プログラムで視察予定のムアール市を訪問。UTHM との協力による都市開発に関する説明を受け、その後意見交換を行った。意見交換終了後、現地を視察した。



6 トウン・フセイン・オン大学 (UHTM) 訪問 12月16日 (月)

1) UTHM 関係者との意見交換 (10:30~12:00)

UTHM : Ts.DR.HJ.NOOR AZIZI BIN YUSOFF Head of Centre of Excellence (COE) ほか
 本学 : 寺本理事、山田准教授、吉田課長

概要

- ・ UTHM の教育、研究、地域との連携活動の紹介を受け、優れた取り組みが行われていることを確認した。
- ・ 多くの教員が日本の大学で学位を取得しており、日本の大学との研究・教育交流を希望している。現在の協定を大学間にする事で、マッチングファンドを取りやすいことが紹介された。
 そのほか、研究者の相互派遣を積極的に行い、講演会や授業の提供、地域（ムアール市）と地域（佐賀市）の交流について述べられた。
- ・ 本学で現在検討している派遣留学を組み込んだ学位プログラムについて紹介し、学生の派遣先として UTHM が有力候補であると伝えた。
- ・ 令和2年3月に本学学生を派遣するプログラムの内容について確認をした。
- ・ Nizam 先生が窓口となり、現在の協定書の見直し案を1月下旬までに作成し、UTHM での合意を経て本学に提示される予定。



2) 学生向け留学説明会 (10:30~12:00)

上記の意見交換と並行して別の場所で学生を対象とした本学の留学説明会を実施した。

説明者 : 木下係員、山田国際交流推進センターコーディネーター

参加人数 : 90名程度

内容：説明資料をもとに佐賀大学の概要、交換留学制度、工学系研究科 PPGA、SIPOP 等について説明した後、質疑応答を行った。



3. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学では帰国留学生等を佐賀大学の友好特使として委嘱している。この友好特使を通じて海外の教育・研究情報、現地ネットワークに関する情報の収集や発信を行い、留学生との交流および国際学術交流の推進を図っている。本年度も新たに、2人の方に佐賀大学友好特使を委嘱した。ホームカミングデー in クアラルンプール（2.1参照）の中で、本学で学んだマレーシア人留学生会の発足式が行われ、顧問のマレーシアプロトラ大学 ナザミッドサアリ教授、副会長補佐のトゥンフセインオン大学 ムハンマド ニザム ビン ザカリア上級講師から、留学生会を通じ、マレーシアにおける佐賀大学関係者の連携を深めていきたい旨の挨拶がなされた。今後の留学生会の発展を期待し、寺本副学長から上記2名に佐賀大学友好特使を委嘱した。今後、佐賀大学海外同窓会ネットワーク（マレーシア元佐賀大学留学生会：SUMAC）をSNSの活用等により更に強化して行くことに期待している。

委嘱日	国名	名前	所属・職名（委嘱時）	備考
平成25/9/20	中国	葛堅	浙江大学 建築工程学院 教授	元佐賀大学教員
		石 堅忍	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
		欧阳 金龙	四川大学 建築・環境学部 准教授	佐賀大学卒業生
		官 冬杰	重慶交通大学 教授	元佐賀大学非常勤研究員
		应 小宇	浙江大学城市学院 准教授	佐賀大学卒業生
		王 纯彬	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
		祁 巍鋒	浙江大学 建築工程学院 講師	佐賀大学卒業生
平成25/11/1	日本	副島善文	日本たばこ香港取締役会長、香港佐賀県人会会長	香港中文大学プログラム
平成26/1/15	スリランカ	Saliya de Silva	Senior Lecturer, Head of the Dept. of Agricultural Extension, Faculty of Agriculture, University of Peradeniya（現在：佐賀大学経済学部教授）	佐賀大学卒業生
	タイ	Chollada Luangpituksa	Associate Professore, Vice Dean, Faculty of Economics, Kasetsart University	研究交流・学生交流キーパーソン
	ニュージーランド	Ken Jackson	Research Professor, AIS St Helens; Research Associate and Former Director, Center for Development Studies, Auckland University	研究交流・学生交流キーパーソン
平成26/5/30	日本	北村 隆則	香港中文大学 教授、元香港総領事	香港中文大学プログラム
平成26/7/7		江頭 利将	セイカン総合エンジニアリング 最高執行責任者（COO）、上海佐賀県人会幹事長	学生交流キーパーソン
平成28/2/6	タイ	Panmanas Sirisomboon	Associate Professor, Department of Agricultural Engineering, Faculty of Engineering, King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	佐賀大学卒業生
平成29/2/11	ベトナム	Ngo Minh Thuy	ハノイ国家大学外国語大学 副学長	研究交流・学生交流キーパーソン
平成29/12/9	中国	李 徳勝	北京工業大学 教授	佐賀大学卒業生
		宋 麗紅	天津科技大学 准教授	佐賀大学卒業生
平成31/2/16	インドネシア	Susanto Somowiyarjo	ガジャマダ大学 教授	佐賀大学卒業生
		Indra Nugraha Abdullah	ヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジア	佐賀大学卒業生
令和元/12/14	マレーシア	Nazamid Saari	マレーシアプトラ大学 教授	佐賀大学卒業生
	マレーシア	Muhammad Nizam bin Zakaria	トゥン・フセイン・オン大学 上級講師	佐賀大学卒業生

Ⅱ. 学生交流

1. 留学生受入れ

1.1 留学生受入れの概況

平成22年から令和元年（5月1日）までの過去10年間の留学生数（学位取得を目的とする留学生、交換留学生、研究生）の推移を以下に示す。留学生数は平成19年の332人をピークに減少を続けていたが、平成28年の207人で底を打ち、平成30年には240人にまで回復した。令和元年度は234人と、若干減少している。

これを国籍別（表1）で見ると、中国人留学生が平成28年度の63人を底に、令和元年度には86人に増えている。これは、日本全体で中国人留学生数が回復傾向にあることを反映しているものと思われる。また、ミャンマーからの留学生が11人と、過去最高を記録した。ミャンマー人向けの奨学金（戸上電機製作所奨学金）が創設されたことなどが要因であろう。また、インドネシアに関しては、インドネシア政府（DIKTI）奨学金の受給対象大学から外れたことで、政府奨学金を受給して本学に留学することができなくなったことが影響し、平成27年度までは5名まで減っていたが、令和元年度には16人が在籍している。これは交換留学生が増加したことによるものである。マレーシア人留学生の人数も、理工学部の正規学生を中心に、安定した推移を見せている。短期留学生を中心に、欧米からの留学生も増えている。過去数年間は、フィンランドとリトアニアからの学生が毎年在籍している。一方で、タイは平成30年度に激減した。これは文部科学省奨学金の受給者が同時期に卒業したことによるものであるが、令和元年度も引き続き低水準である。

留学生の出身国の多様化も進んでおり、過去6年間は20カ国を超えている。平成27年度より始まった ABE イニシアティブによる受け入れ対象国が増加傾向にあり、令和元年度にはベナンからの学生を受け入れた。

次に、学生の在籍身分別（表2）の推移をみると、過去3年間は、学位取得をめざした正規留学生・研究生数がやや回復している。ただし、学部生、大学院生の内訳で見ると、令和元年度に大学院生が110人と増加した一方で学部生は2名減の42人と、若干減少している。安定的な増加傾向にあるとは言えない。

他方、特別聴講学生（交換）・短プロ SPACE（交換）の協定校からの交換留学生数は50人前後で推移しており、平成30年度には過去最高の64人を記録した。ただ、令和元年度からは短プロのうち、SPACE-J プログラムの新規募集を停止し、特別聴講学生（交換）としての受入れに切り替えたことで、総数は若干減少した。近年は、交換留学経験者が佐賀大学に戻ってくるケースも増えている。上記の大学院生・研究生のうち、11人を占めており、交換留学生の増加が、正規の大学院生の増加に寄与する流れができつつあると言えるだろう。

今後は、学部の正規学生受け入れの見直しのほか、大学院レベルでは、相手国政府奨学金の獲得を本学からも積極的に支援すること、各研究科が実施する特色ある留学生受入プログラムや、海外の大学等と連携して実施する共同研究などを促進し、本学大学院への進学を促すなどの方策を引き続き検討する必要があるだろう。また、SPACE-E をより魅力あるものに改革することや、新たな短プロを開発するなどの取り組みも鍵となるであろう。

個別国への対応としては、海外版ホームカミングデーを開催するなど、留学生の誘致に取り組んでいるところである。平成29年12月に中国の北京で、平成31年2月にはインドネシアのジャカルタで、そして令和元年12月には、マレーシアのクアラルンプールにおいて開催した。

これらに引き続き取り組むほか、積極的な日本留学フェア等への参加や継続的な協定校等への直接的訪問などによる佐賀大学のプロモーション活動、本学で学位を取得し帰国した元留学生等との交流強化及びネットワークの活用、同時にホームページや SNS 等による広範囲な不特定多数に向けた大学広報等を行うことなどが考えられる。これらはすでに着手しており、一部、効果が見られ始めているが、引き続き取り組んでいく必要がある。

【表1】平成22年～令和元年 国籍別留学生数の推移

(毎年5月1日集計)

国・地域		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元
アジア	中国	162	161	145	136	109	93	63	74	79	86
	インドネシア	33	33	28	22	17	5	10	11	19	16
	マレーシア	10	13	20	24	21	20	16	15	19	18
	韓国	27	21	19	16	16	9	18	17	18	17
	バングラデシュ	19	15	13	11	7	18	24	26	26	25
	ベトナム	14	14	18	14	13	17	12	15	14	11
	台湾	7	11	9	8	14	11	11	8	15	13
	タイ	5	5	6	11	10	12	19	19	8	7
	スリランカ	9	10	9	7	8	5	6	6	5	5
	ネパール	8	7	5	2	2	2	3	1	0	1
	カンボジア	0	0	1	1	4	1	3	3	5	2
	ミャンマー	0	0	0	0	0	1	3	5	8	11
	モンゴル	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1
	パキスタン	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0
	ラオス	0	1	1	0	1	0	0	3	0	0
インド	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
	小計	296	293	275	253	223	196	189	204	216	213
中南米	ブラジル	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
中近東	イラン	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0
アフリカ	エジプト	0	0	0	1	1	2	3	3	2	1
	サントメ・プリンシペ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	ウガンダ	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
	ナイジェリア	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	モザンビーク	0	0	0	0	0	1	2	2	3	2
	ケニア	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0
	セネガル	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1
	チュニジア	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
	モロッコ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
	南スーダン	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	ガーナ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	エチオピア	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	南アフリカ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	ルワンダ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	ベナン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	小計	2	1	1	2	1	4	9	11	13	9
北米	アメリカ	0	1	0	2	2	1	1	1	0	1
	カナダ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	1	1	0	2	2	1	1	1	0	1
オセアニア	オーストラリア	0	0	0	0	1	3	1	2	1	1

ヨーロッパ	オランダ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	フランス	2	0	1	2	2	1	2	1	3	3
	フィンランド	0	0	0	0	0	2	1	1	1	2
	ポーランド	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0
	リトアニア	0	0	0	1	0	1	0	2	3	3
	アルメニア	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	スウェーデン	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	ベルギー	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	セルビア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	ドイツ	0	0	0	0	0	0	1	1	3	1
	トルクメニスタン	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	カザフスタン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	小計	3	1	2	3	5	5	6	6	10	10
	計	302	297	279	261	233	209	207	224	240	234
国数	17	17	17	18	21	23	27	29	26	28	

※在留資格「留学」の学生数
鹿兒島連大含む

【表 2】平成22年～令和元年 在籍身分別留学生数の推移

(毎年 5 月 1 日集計)

在籍身分	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元
正規生 (学位取得)	205	200	195	187	160	144	135	140	147	152
うち 学部生	51	54	74	75	71	61	43	37	44	42
うち 大学院生	154	146	121	112	89	83	92	103	103	110
研究生	20	22	13	7	4	8	4	11	12	15
特別研究学生 (交換)	2	1	2	3	2	3	3	1	5	1
特別聴講学生 (交換)	33	31	30	25	0	0	0	0	0	16
短プロ SPACE (交換)	20	18	16	24	57	48	55	58	64	39
科目等履修生	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0
日本語・日本文化研修留学生	1	0	1	1	3	2	4	1	1	1
連合大学院	20	22	22	14	7	4	6	13	11	10
計	302	297	279	261	233	209	207	224	240	234

※在留資格「留学」の学生数
休学含む
鹿兒島連大含む

なお、平成25年10月より日本語で専門科目を履修する交換留学生のための短期留学プログラム (SPACE-J) が開始となり、平成26年度からは、特別聴講学生 (交換) に分類されていた留学生は短期留学プログラムに加えられる。

1.2 佐賀大学短期留学プログラム (SPACE)

1.2.1 SPACE-E 実施報告

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授 (国際交流推進センター)

1. 令和元年度春学期 (平成31年4月～令和元年9月)

■実施概要

平成30年10月に入学した第18期の学生のうち11人が2学期目も続けてSPACE-Eで学修した。そして、4月入学の学生11人を受け入れた。これら計22人の学生の出身国・地域別の人数は、台湾人3、韓国人3、インドネシア人6、マレーシア人2、リトアニア人1、フランス人1、アメリカ人1、フィンランド人2、バングラデシュ人1、カザフスタン人1、スリランカ人1である。受け入れ学部別数 (継続学生数+新規学生数=合計数) を見ると、教育学部4+3=7人、経済学部1+3=4人、理工学部5+4=9人、農学部1+1=2人となっている。学生は選択の「日本事情研修B」、「日本語」、「異文化交流インターフェース科目」、および各学部が提供している「専門選択科目 (英語による講義)」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生と、ほかの学部の学生で希望する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題 (以下の表参照) を設定して、受け入れ教員から個別に指導を受けた。今学期に日本語カリキュラム削減を行ったため、日本語の時間数が減った。

令和元年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
I	演習 (B) 漢字	日本に関する WEB ページ制作応用	総合初級 I 総合初級 II	総合初級 I 総合初級 II 総合中級 I	
II	総合初級 I	総合初級 II 総合中級 I		異文化交流Ⅲ (地域社会参加) 異文化交流Ⅲ (倫理)	総合中級 I
III		演習 (A) チュートリアル パブリックスピーキング	我が国の食と教育 (食育)	アカデミックジャパニーズ A	
IV	文法発展導入	理工学紹介 B	SPACE-E 日本事情研修 B	聴解中級 (A)	
V			農学入門 B 食品と環境	第二言語習得・バイリンガリズム研究入門	

「日本語」は、能力別クラスになっており、レベル1 (日本語初級 I) からレベル6 (上級 II) までであるが、表には日本語初級 I から中級 I までをのせている。

春学期の学外研修等

H31年 4月	日本事情研修 (福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮)
令和元年 5月	長崎原子爆弾被爆体験講話参加
6月	日本文化研修 (折り紙)
7月	日本事情研修 (キューピー工場、キリンビール工場見学)

春学期入学者（11か国・地域 17大学 22人）

	国・地域	性別	大学名	在学期間
1	台湾	女	国立中興大学	1年
2	台湾	女	東華大学	半年
3	台湾	女	東華大学	1年
4	韓国	女	全南大学	半年
5	韓国	男	国民大学	半年
6	韓国	男	釜慶大学校	半年
7	インドネシア	男	リアウイスラム大学	1年
8	インドネシア	男	リアウイスラム大学	1年
9	インドネシア	男	ブラウイジャヤ大学	1年
10	インドネシア	男	ブラウイジャヤ大学	半年
11	インドネシア	男	セベラスマレット大学	1年
12	インドネシア	男	マラン国立大学	1年
13	マレーシア	女	トゥンフセインオン大学	半年
14	マレーシア	女	トゥンフセインオン大学	半年
15	リトアニア	男	ヴィタウタスマグヌス大学	1年
16	フランス	女	ブルゴーニュ大学	1年
17	アメリカ	男	スリッパリーロック大学	1年
18	フィンランド	女	ユバスキュラ大学	1年
19	フィンランド	男	ユバスキュラ大学	1年
20	バングラデシュ	男	チッタゴン工科大学	1年
21	カザフスタン	男	カザフ建築アカデミー	1年
22	スリランカ	女	ペラデニア大学	1年

自主研究テーマ（平成31年4月～令和元年9月）

学部	期間	受入教員	自主研究テーマ（和文）
経済	平成30.10～ 令和元.9	中 西 一	課税の労働供給に対する効果
理工	平成30.10～ 令和元.9	大 渡 啓 介	カリックス〔4〕アレーン誘導体を基体とするナトリウム選択性イオン交換樹脂の開発
理工	平成30.10～ 令和元.9	福 田 修	ゲームにおけるレベル設計に関する研究
理工	平成30.10～ 令和元.9	後 藤 聡	海水淡水化システムの遠隔監視に関する研究
理工	平成30.10～ 令和元.9	奥 村 浩	QRコードの改善に関する研究
理工	平成30.10～ 令和元.9	猪八重 拓 郎	地理情報システムを用いた防犯の研究
農	平成30.10～ 令和元.9	辻 田 忠 志	転写因子 Nrf1 を制御する物質を探索する新規実験系の構築
理工	平成31.4～ 令和2.3	小 島 昌 一	日本のメタポリスティク概念を適用した地下構造物と住居の開発
理工	平成31.4～ 令和元.9	三 島 伸 雄	持続可能な歴史的な地方都市の空間的実態に関する研究

理工	平成31. 4 - 令和元. 9	上野直広	PCAによる応力発光イメージの分析
理工	平成31. 4 - 令和元. 9	奥村浩	IOSデバイスを用いた頭位計測制御に基づくアプリケーションの開発と応用
農	平成31. 4 - 令和2. 3	長裕幸	地球化学反応モデルを用いた酸性土壌の改良方法の検討
経済	平成31. 4 - 令和元. 9	山形武裕	コーポレート・ガバナンスの情報開示に関するイベント・スタディ分析

2. 令和元年度秋学期（令和元年10月～令和2年3月）

■実施概要

令和元年10月に新たに第18期の学生29人が入学した。4月に入学した学生人のうち、10月期も継続した4人と合わせて33人がSPACE-Eの学生として秋学期の科目をSPACE-Eで学修した。出身国・地域別の人数は、中国3人、韓国3人、台湾7人、カンボジア1人、スリランカ1人、インドネシア6人、バングラデシュ1人、ベトナム1人、カザフスタン1人、リトアニア3人、フィンランド3人、ドイツ1人、アメリカ2人である。受け入れ学部別数（継続学生数+新規学生数=合計数）を見ると、文化教育学部・教育学部1+11=12人、芸術地域デザイン学部0+2=2人、経済学部1+6=7人、理工学部1+10=11人、農学部1+0=1人となっている。学生は各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」、さらに必要に応じて「日本事情研修A」、「日本語」あるいは「異文化交流」インターフェイス科目を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生および、ほかの学部の学生で希望する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。学部や全学教育機構提供の選択科目や教養科目が増えた。

令和元年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
I		日本に関するWEBページ制作(教)	総合初級I 総合初級II Critical thinking for the Modern Age(全)	総合初級I 総合初級II 総合中級I Cultural Metaphors Life in the Global World(全)	演習(D)漢字
II	我が国の環境保全の最新情報(教)	総合初級II 総合中級I	異文化交流II(SPACE-Eとの交流)	異文化交流IV(野外手法:言語学) Introduction to Science	総合初級I 総合中級I
III		演習(C)	アカデミックジャパニーズC Reading	英語オーラルコミュニケーションI(教) Contemporary social and economic issues in Japan(経)	
IV		日本と東南アジア関係論(教)	SPACE-E日本事情研修A	英語オーラルコミュニケーションI(教)	英語アカデミックスピーキングI(教)
V			Introduction to Agriculture A: Production and Management(農)	英語オーラルコミュニケーションII(教)	理工学紹介A(理)

「日本語」は能力別クラスになっており、レベル1（日本語初級I）からレベル6（上級II）までであるが、表には日本語初級Iから中級Iまでをのせている。

(全)：全学教育機構 (経)：経済学部 (農)：農学部 (理)：理工学部 (教)：(文化)教育学部

秋学期の視察・見学等

R元年	11月	多文化防災セミナーに参加（異文化交流Ⅳの学生と一緒に） 日本事情研修・A（伊万里、有田焼研修旅行）
	12月	
R2年	1月	日本事情研修（羊羹資料館、酒造研修）

SPACE-E 秋学期在籍者（13ヶ国・地域 20大学33人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女		西南政法大学	1年
2	中国	男		浙江科技学院	半年
3	中国	女	JASSO	浙江科技学院	半年
4	韓国	女		国民大学	半年
5	韓国	男		国民大学	半年
6	韓国	男		全南大学	半年
7	台湾	女	JASSO	国立中興大学	1年
8	台湾	女		国立中興大学	半年
9	台湾	女	JASSO	東華大学	1年
10	台湾	女	JASSO	東華大学	1年
11	台湾	女	JASSO	国立政治大学	半年
12	台湾	女		国立台北大学	半年
13	台湾	男		国立台北大学	1年
14	カンボジア	女	JASSO	王立法経大学	半年
15	スリランカ	女	佐賀大学奨学金	ペラデニア大学	1年
16	インドネシア	男		リアウイスラム大学	1年
17	インドネシア	女		ランブマンクラット大学	半年
18	インドネシア	女		ランブマンクラット大学	半年
19	インドネシア	女		ランブマンクラット大学	半年
20	インドネシア	女		ランブマンクラット大学	半年
21	インドネシア	女		マラン国立大学	1年
22	バングラデシュ	男	佐賀大学奨学金	チッタゴン大学	1年
23	ベトナム	女		ハノイ国家大学外国語大学	1年
24	カザフスタン	男	JASSO	カザフ建築アカデミー	1年
25	リトアニア	女	JASSO	ヴィダウタスマグヌス大学	1年
26	リトアニア	男	JASSO	ヴィダウタスマグヌス大学	1年
27	リトアニア	男		ヴィダウタスマグヌス大学	1年
28	フィンランド	男		ユバスキュラ大学	1年
29	フィンランド	男	JASSO	ユバスキュラ大学	1年
30	フィンランド	男		ユバスキュラ大学	1年
31	ドイツ	女	佐賀大学奨学金	ハレ芸術大学	半年
32	アメリカ	女		スリッパリーロック大学	1年
33	アメリカ	男	JASSO	スリッパリーロック大学	1年

令和元年度秋学期（令和元年10月～令和2年3月） 自主研究テーマ

学部	期間	受入教員	自主研究テーマ（和文）
理工	平成31.4～ 令和2.3	小島昌一	地下建築および地下住居の開発
農	平成31.4～ 令和2.3	長裕幸	バイオチャーを用いた酸性土壌の改良
芸地 デ	令和元.10～ 令和2.3	土屋貴哉	習慣の対比に関する研究
理工	令和元.10～ 令和2.3	山下義行	Pythonを用いたデータ解析と可視化に関する考察
理工	令和元.10～ 令和2.3	寺本顕武	音響ブラインド信号分離に関する基礎研究
理工	令和元.10～ 令和2.9	村松和弘	磁器解析を用いた電気機器の最適設計
理工	令和元.10～ 令和2.9	奥村浩	Pythonを利用したデジタルデータ処理の基礎と応用
理工	令和元.10～ 令和2.9	奥村浩	Pythonを利用したデジタルデータ処理の基礎と応用
理工	令和元.10～ 令和2.3	三島悠一郎	テーマ1：佐賀市下水浄化センターで排出される余剰熱利用に関する研究 テーマ2：FORTRAN 数値モデルによる単純構造の解析に関する研究
理工	令和元.10～ 令和2.3	日野剛徳	インドネシアにおける災害のアーカイブ化と地域的性質に関する基礎的研究
理工	令和元.10～ 令和2.3	平瀬有人	日本の狭小住宅に関する研究
理工	令和元.10～ 令和2.3	宮良明男	低GWP冷媒の輸送性質に関する研究
理工	令和元.10～ 令和2.3	福田修	グーグルマップを利用した視覚障害者のための位置追跡システム
教育	令和元.10～ 令和2.9	角縁進	大分県耶馬溪玄武岩類の岩石鉱物学的研究
経済	令和元.10～ 令和2.9	亀山嘉大	シェアサイクルの普及によるまち乗り・観光の振興
理工	平成31.4～ 令和2.3	小島昌一	地下建築および地下住居の開発

1.2.2 SPACE-J実施報告

■コース概要

SPACE-Jは佐賀大学の協定校に所属する学生を対象としたプログラムである。日本語能力試験（JLPT）N2相当以上の日本語能力を有することが参加の前提である。日本語や日本社会について学べるほか、個々の学生の専攻に応じた授業を日本語で履修できるカリキュラムを提供している。また、必修科目である「日本事情研修C/D」では、学期ごとにテーマを設定し、体験型の学習を行うことで、日本や佐賀についての理解を深めたり、他国からの留学生と交流したりする機会を提供している。

SPACE-Jには、レギュラーコースとブリッジコースの2種類が設けられている。来日当初のプレースメントテストの結果、日本語能力が初中級・中級レベルと判定された学生は、ブリッジコースに参加し、日本語を優先的に学修する。1学期終了後に十分な日本語能力を獲得していれば、レギュラーコースに移ることができる。それぞれのコースの履修科目は下記のとおりである。学生は、1学期あたり最低10単位を修得することが求められる（平成30年度春学期入学生より適用）。条件を満たした学生には、修了時に佐賀大学から修了証が授与される。

なお、平成31年度春学期以降、SPACE-Jプログラムの新規募集を停止したため、同学期は、前年度からの継続学生のみがプログラムに参加することとなった。

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（国際交流推進センター） 吉川 達 講師（国際交流推進センター）

SPACE-Jの履修科目

SPACE-J	レギュラーコース		日本事情研修	必修2単位	1学期あたり10単位以上
			専門科目等	選択	
			日本語科目	選択	
	ブリッジコース	中級	日本事情研修	必修2単位	
			日本語科目	4単位以上	
			専門科目等	最大4単位	
		初中級	日本事情研修	必修2単位	
			日本語科目	8単位以上	

1. 令和元年度春学期（平成31年4月～令和元年9月）

■実施概要

令和元年度春学期のSPACE-Jプログラムの参加者数は、前年度からの継続者17人であった（ブリッジコース参加者はゼロ）。ただし、日本事情研修や日本語授業科目、日本事情といった主要科目については、新規来日の特別聴講学生（一般）も履修していたため、新たな留学生との交流を深めることも可能となった。

令和元年度春学期の視察・見学等

令和元年6月	日本事情研修（佐賀県立名護屋城博物館、呼子大綱引き）
--------	----------------------------

春学期入学者（6カ国・地域 11大学17人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女		遼寧師範大学	1年
2		女			1年
3		女		北京工業大学	1年
4		女			1年
5		男		西南政法大学	1年
6		女		華東理工大学	1年
7		女			1年
8		女			1年
9	韓国	女		安東大学校	1年
10		男			1年
11		男		木浦大学校	1年

12	台湾	男		国立連合大学	1年
13		男	JASSO	国立中興大学	1年
14	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学	1年
15		女	JASSO	ハノイ外国語大学	
16	インドネシア	女	JASSO	ガジャマダ大学	1年
17	タイ	女	JASSO	チェンマイ大学	1年

■日本事情研修

春学期の日本事情研修Dは、「スポーツと余暇」をテーマとして、柔道体験や自分の国の遊びの紹介、日本人の余暇に関する調査を通じて、スポーツと余暇の位置づけについて日本と自国の文化を比較しながら理解を深めた。また、中国大陸や朝鮮半島と日本との間の交流についての学びを深めるため、佐賀県立名護屋城博物館への見学を行った。さらに、呼子町の伝統的な催しである呼子大綱引に実際に参加することで、地域の習慣や祭の雰囲気を感じつつ、日本における余暇やスポーツについての理解を深めた。

■奨学金

令和元年度は、JASSO 奨学金を、前年度からの参加学生5人に継続支給した。そのうち東南アジアの学生4人に支給することで、プログラム参加学生の出身地の多様化、ひいては佐賀大学の日本人学生との交流機会の多様化に貢献したと考えられる。



呼子大綱引き



名護屋城見学

1.2.3 SPACE-ARITA 実施報告

■コース概要

SPACE-ARITA は佐賀大学の協定校に所属する芸術・デザイン分野の、主に陶磁器による表現を専門的に学ぶ留学生を対象としたプログラムである。在籍校にて陶磁器の授業やプログラムを履修していることが参加の前提である。メインプロジェクトである「自主研究 C/D」を軸に、肥前地区の窯業について学ぶフィールドワークである「日本事情研修 E/F」、さらに各自の研究や興味関心により、佐賀大学学生に開講されている授業を共に受講することで、専門性を高めることができる、ユニークで柔軟なカリキュラムを提供している。留学生はSPACE-ARITA のプログラムの中で、日本人学生や地元の人々との学術的で有意義な交流を通じて、日本の社会や地域の人々への認識や理解を深めることができる。

また、学期が始まってひと月経った頃に、自己紹介を兼ねたパネルプレゼンテーションを本庄キャンパスで開催している。これはSPACE-ARITA の留学生と本学学生との交流の場をつくるとともに、平成27年度に新しく交流協定が締結された Burg Giebichenstein University of Art and Design Halle/GERMANY (以下 BURG/Halle) と Design Academy Eindhoven/THE NETHERLANDS (以下 DAE) の、両校での授業内容やキャンパスライフ、現地生活情報などを本学学生に提供する目的でもある。SPACE-ARITA では DAE および BURG/Halle からの学生を受け入れることが多いためである。そうすることで本学学生が将来留学を目指す動機付けになることを期待している。

履修科目は以下の表のとおりである。

留学生の最低履修要件は、各学期12単位以上で、修得した単位は佐賀大学の成績証明書として発行される。また、留学期間の終わりに、要件を満たした留学生は佐賀大学から修了証が授与される。学期終了後に、この修得した単位数を、留学生の在籍校の国際課またはそれに相当する課に報告する。

■コーディネーター

三木 悦子 講師 (芸術地域デザイン学部)

■指導教員

※留学生の研究内容により各研究段階によって専門分野の教員が指導する。

田中 右紀 教授 (芸術地域デザイン学部)

赤津 隆 教授 (芸術地域デザイン学部)

湯之原 淳 講師 (芸術地域デザイン学部)

甲斐 広文 講師 (芸術地域デザイン学部)

三木 悦子 講師 (芸術地域デザイン学部)

SPACE-ARITA の履修科目

SPACE-ARITA	必修科目	自主研究 C/D	6 単位	1 学期あたり 12 単位以上
		日本事情研修 E/F	2 単位	
	選択科目	ロクロ成形 I / II / III	2 単位	
		石膏型成型 I / II / III	2 単位	
		陶磁成形技法 I / II / III	2 単位	
		装飾技法 I / II / III	2 単位	
		釉薬化学 I / II	2 単位	

■ 「自主研究 C/D」

「自主研究 C/D」は交換留学生のメインプロジェクトで、週の大半をこの時間に費やす。最初に有田で習得したい内容の研究テーマを設定し、基本的に毎週行われる教員とのミーティングを経て方向性を決定する。そして、相互に関連する「日本事情研修 E/F」と共に、研究への調査や試作・試験を行い、プロジェクトの内容を充実させる。各自の研究テーマに即し、アイデアの設計、型作り、生地成形、焼成等、やきものの過程を学習し、スケジュールを含むプロジェクト全体を留学生自身で管理する。肥前窯業圏特有の専門的な知識によるアドバイスや技術指導は、毎週行われるミーティングで確認し、それぞれの進捗に合わせて専門教員が適宜行う。

留学期間の最後に、研究の軌跡をまとめた Booklet 作成と、学期終了後に最終プレゼンテーションを有田キャンパスにて企画開催する。これは SPACE-ARITA は有田キャンパスを中心に「自主研究 C/D」や「日本事情研修 E/F」において肥前窯業圏で様々な企業や団体、作家、また窯業技術センターや九州陶磁文化館、有田町歴史民俗資料館などの公的機関と関わりながら学習すること、そして有田町での生活を通して留学生が関わった地域住民に学習成果を還元する目的で行う。最終プレゼンテーションには佐賀大学の教員や学生、肥前地区の窯業関係者、地域住民、メディアなど、約50名の方々が参加する。

■ 「日本事情研修 E/F」

「日本事情研修 E/F」では、肥前地区の陶磁器産業の現場見学や、美術館や博物館見学による歴史的な観点を学び、肥前のやきものへの理解を深める。日本磁器発祥の地であり、世界に羽ばたいた有田焼の特殊性と、肥前窯業圏の様々なやきもの表現、陶磁器産業の現在を、日本文化を通して知る。見学先で調査や意見交換を行い、国ごとの陶磁器産業の比較を通して相対的にやきものを見ることで、改めてやきものの在り方について考える機会とする。ここでは留学前に描いていた日本の陶磁器やそれに関連する文化に対する新たな気づきを得る。

週1回、全15回の授業を、窯業関連の様々なところに訪問し見学するフィールドワークとして行い、自主研究との関連性を深めるため、基本的に学期の初旬（前期：4月～5月、後期：10～11月）にかけて行う。最後に、調査・見学の軌跡をまとめた Booklet を作成する。

1. 令和元年度秋学期（令和元年10月～令和2年2月）

■実施概要

令和元年10月にオランダ DAE より韓国人1名、オランダ人1名、計2名の学生を芸術地域デザイン学部芸術表現コース有田セラミック分野にて受け入れた。学生は、必修科目である「自主研究C」と「日本事情研修E」、選択必修の「石膏型成型Ⅱ」または「陶磁器成形技法Ⅱ」、そして「ロクロ成形Ⅱ」と「装飾技法Ⅱ」を履修した。

秋学期入学者（2か国・地域 1大学 2人）

	氏名	性別	大学名／国・地域	在籍校での専攻	在学期間
1	Mr. Moonseop SEO	男	Design Academy Eindhoven (NETHERLAND)	Man & Wellbeing	半年
2	Ms. Marieke Maria Johanna VAN SCHIJNDEL	女		Man & Leisure	半年

令和元年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
I	ロクロ成形Ⅱ		(自主研究C)		(自主研究C)
II	ロクロ成形Ⅱ	「自主研究C」 全体ミーティング	(自主研究C)	SPACE-ARITA 日本事情研修E	(自主研究C)
III	石膏型成型Ⅱ 陶磁成形技法Ⅱ	(自主研究C)	(自主研究C)		装飾技法Ⅱ
IV	石膏型成型Ⅱ 陶磁成形技法Ⅱ	(自主研究C)	(自主研究C)		装飾技法Ⅱ
V		(自主研究C)	(自主研究C)		

■「パネルプレゼンテーション」

11月27日（水）16：20～17：50、A101教室にて開催。SPACE-ARITA 留学生2名と、芸術地域デザイン学部で受け入れたBURG/HalleからのSPACE-Eの留学生1名の発表の後、学生・教員交えたディスカッションと交流会が行われた。



■ 「自主研究C」

「自主研究C」テーマ

<p>1</p>	<p>Mr. Moonseop SEO</p>	<p>「間」 有田の町の景色の中に見た、モノとモノの間に息づく存在、苔や雑草、集まる水、通り抜ける空気、その隙間から感じるエネルギーに着想を得た。この「間」の表現として、一つの単純なリングとプレートのユニットを透明な釉薬によって接着する。そこに光が溢れることで「間」の存在が浮かび上がる。このユニットを組み合わせることで用途を持つシリーズを展開した。</p>	
<p>2</p>	<p>Ms. Marieke Maria Johanna VAN SCHIJNDEL</p>	<p>「A sence of the season」 日本の伝統的な文様、そこには日本独特の気候風土を表す様々な自然や自然現象をモチーフにしたものも多く見られる。その中から雨や雲、霧、靄など、湿度や水を含んだ表情を持つ文様を研究し、自分なりに読み解いて解釈し、作品に落とし込んで表現した。</p>	



■ 「日本事情研修E」

オリエンテーションで学生に配布する、春学期の見学等を記した予定表は以下の表の通りである。

日本事情研修予定表：The schedule of "Field work on Japanese affairs" 2020

	日	時限	内容
1	3-Oct Thu	Ⅱ 10:00～12:00	オリエンテーション・泉山陶土採掘場、有田歴史民俗博物館見学 Introduction, to visit Izumiyama Quarry and Arita Fork & History Museum
2	4-Oct Fri	Ⅱ 10:00～11:30	九州陶磁文化館見学 to visit Kyushu Ceramic Museum
3	10-Oct Fri	I～Ⅳ 10:30～11:30 13:00～13:45 14:00～15:00 15:15～16:00 16:15～17:00	肥前地区の焼物産業について学ぶ－有田・波佐見 vol.1 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.1 (1 day field work in Arita) 田島商店・山辰製型所：Tajima clay factory, Yamatatsu model&mold making factory 柿右衛門窯：Kakiemon (traditional pottery, national treasure 14th Kakiemon) 香蘭社：Koransha (porcelain manufacturer) 錦右エ門陶苑：Kin'emon-touen (pottery) 卸団地他：Arita Será the showrooms of wholesale company
4	17-Oct Thu	Ⅲ～Ⅴ 13:00～13:45 14:00～15:00 15:15～15:45 16:00～16:30 16:40～17:20	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 有田・波佐見 vol.2 (フィールドワーク (学外見学半日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.2 (0.5 day field work in Hasami) 福稔生地：Fukutoshi raw products making factory 西山：Nishiyama (porcelain manufacturer) 木村鑄込：Kimura raw products making factory 白山陶器：Hakusan Porcelain (porcelain manufacturer) 焼物公園・西の原南倉庫： Open Air Museum of Kilns in Hasami, the shopping place of porcelain
5	21-Nov Thu	I～Ⅴ 9:00～10:30 11:20～12:00 14:00～15:00 15:30～17:00 17:30～18:00	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 伊万里・唐津周辺 vol.3 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.3 (1 day field work to Imari and Karatsu) 畑萬陶苑・大川内山見学 ：Hataman-touen (pottery), to see around the porcelain field of Nabeshima domain "Imari Ohkawachi-yama" 川上清美陶房：Kawakami Kiyomi-toubou (pottery) 太郎衛門窯：Tarouemon-kama (traditional pottery) 唐津城：Karatsu-jo (the important castle of porcelain of Karatsu domain in Edo period) 草伝社：Sodensha (the shop of porcelain)
6	19-Dec Thu	Ⅱ 10:00～11:30	プレゼンテーション・ブックレット提出 Short presentation with Booklet



■ 「最終プレゼンテーション」

2月17日(水) 17:00~18:10、有田キャンパス、プロジェクトルームにて開催。SPACE-ARITA での半期の学習成果を「自主研究C」の最終作品やBookletを中心に、「日本事情研修E」のBookletを展示。発表は学生や教員を始め、滞在中に関わった業界関係者や地域住民に広く開かれており、美しく展示された留学生個々の作品と共に、コンセプトや制作過程、その中での課題や解決策、先の展望などの発表を聞き、その後のディスカッションでは様々な意見交換がなされた。最終プレゼンテーション終了後は学生主催の交流会が行われ、共に学んできた時間を懐かしむとともに、最後の別れを惜しむ素晴らしい日になった。



1.3 令和元年度日本語・日本文化研修コース

■コース概要

本学の日本語・日本文化研修コースは、研修生が自らの日本語能力を伸ばすだけでなく、日本人学生と共修することによって、広く日本文化や地域のことを学べるコースとなっている。具体的には、全学教育機構が提供する「外国人留学生プログラムのための授業科目」（日本語科目）や日本人学生との共修科目である「インターフェース科目」、また自分の興味に応じた授業を、佐賀大学の各学部提供科目のなかから選んで履修することができる。これは平成25年度の改革によるもので、これにより、幅広い専門をもった学生が、自分の興味関心に応じた科目を履修することができるようになった。

下記の単位を修得すると、修了時に、佐賀大学から修了証が授与される。

区 分		授業科目名	単位数	修了要件
教養教育科目	外国人留学生プログラムのための授業科目			選択必修 2単位以上修得すること
	インターフェース科目			選択必修 2単位以上修得すること
学部間共通 教育科目	留学生プログラム教 育科目	日本事情研修A	2	選択必修 2単位以上修得すること
		日本事情研修C	2	
		日本事情研修B	2	選択必修 2単位以上修得すること
		日本事情研修D	2	
全学教育機構が開設する授業科目				選択必修 10単位以上修得すること
各学部が開設する授業科目				
計				18単位以上

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（国際交流推進センター） 吉川 達 講師（国際交流推進センター）

■開講期間

平成30年10月～令和元年 8月

■実施概要

令和元年度は、平成30年度後期から在籍していたヴィタウスマグヌス大学（リトアニア）の研修生が佐賀大学で学んだ。受け入れ学部は教育学部である。日本語科目や日本事情研修に積極的に参加し、無事に修了した。加えて、研修生が自らテーマを設定して調査を行い、レポートを作成した。

令和元年度後期からは、前年度同様、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）からの研修生を1名、教育学部で受け入れた。現在は、日本語の能力を伸ばしつつ、日本人学生との共修授業に参加することで、日本社会への理解を深めている。

平成30年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成30年10月～令和元年8月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
リトアニア	女	教育学部	ヴィタウタスマグヌス大学	大学

令和元年度日本語・日本文化研修コース受講生（令和元年10月～令和2年8月予定）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
ベトナム	女	教育学部	ハノイ国家大学外国語大学	大学



日本事情研修Dの授業で呼子大綱引きに参加

1.4 令和元年度日本語研修コース

【開講期間】平成31年4月8日～令和元年8月6日（前学期）、

令和元年10月1日～令和2年2月14日（後学期）

【コーディネーター】吉川 達 講師（国際交流推進センター）

【概要】

大学院入学前予備教育として日本語研修コースを単独で開設しているわけではないが、以下の日本語科目の提供をもって研修コースの役割を果たしている。対象は主に国費外国人留学生であるが、私費留学生についても受講を認めている。日本語初級前半・初級後半・初中級までの3レベルを想定し、受講学生は学期開始時のプレースメント・テストによってレベル判定が行われる。各レベルで実施される日本語授業は以下の通り

初級前半レベル

日本語総合初級 I	3コマ/週
アカデミック・ジャパニーズ A/C	1コマ/週
日本語演習 A/C	1コマ/週
日本語演習 B/D	1コマ/週

初級後半レベル

日本語総合初級Ⅱ	3コマ/週
アカデミック・ジャパニーズA/C	1コマ/週
日本語演習A/C	1コマ/週
日本語演習B/D	1コマ/週

中級前半レベル

日本語総合中級Ⅰ	3コマ/週
アカデミック・ジャパニーズA/C	1コマ/週
日本語演習A/C	1コマ/週
日本語演習B/D	1コマ/週

1.5 香港中文大学学生交流プログラム（短期受入れ）

香港中文大学サマープログラム

- 【実施期間】 令和元年6月26日～7月5日（10日間）
【参加学生】 香港中文大学生10名、佐賀大学生10名
【担当教員】 吉川達講師（国際交流推進センター）、山田直子准教授（同）
【概要】

同年2月に実施された香港への派遣プログラムで交流した香港中文大学生を佐賀で受け入れ、サマープログラムを実施した。プログラム内容としては、佐賀大学生との交流、佐賀の伝統文化施設、史跡等の見学、佐賀大学の授業参加、自主課題調査、合宿、高校訪問である。

交流した佐賀大学生は、同年2月に香港を訪問し、今回受け入れた香港の学生達と交流した学生たちである。久しぶりの再会を喜ぶとともに、佐賀大学生たちは自分たちがホストの役割となることに、責任を感じていた。

香港中文大学生はプログラムの期間中、2人一組になって佐賀大学生の助けを借りながら自分たちの設定した自主課題調査のテーマについて調査を行った。そして、プログラムの最後に調査の結果を発表した。自主課題のテーマは「授業以外の大学生活：課外活動とコンパ文化についての異同」「大学生の読書習慣の違い」「香港の日本焼き肉屋と佐賀の焼き肉屋の異同」「ヘアスタイル・ヘアカラー・ヘアケアについての異同」「香港と日本の休日と祝祭日」であった。

高校訪問では、武雄高校を訪れ、交流活動を行った。武雄高校の2年6組と2年4組の英語の授業に参加し、香港の紹介を英語で行った後、高校生から武雄や佐賀の紹介、日本の遊びの紹介があった。また、授業のあとに武雄高校生の希望者と香港の伝統的な遊びを一緒に体験したり、部活動を見学したりした。交流した高校生は恥ずかしがりながら話しかける生徒が多かったが、留学生がリードして会話を進める場面も多く見られた。交流言語は主に英語であった。

本プログラムの大きな特徴の1つに、香港中文大学生と佐賀大学生との共同合宿がある。本年度は、唐津市の波戸岬少年自然の家において、合宿を行った。合宿では、佐賀大学生と香港中文大学生が協力しながら活動を行ったり、食事を準備したりし、寝食を共にすることでこれまでの関係をより深めた。昨年度は大雨のために合宿が中止になったので、本年度は無事に合宿を行うことができ、学生たちは充実した時間を過ごした。

その他、佐賀大学有田キャンパスや有田町訪問、鹿島でのミニガタリンピック体験などを通じて、香港中文大学生は佐賀での魅力を発見し、佐賀への理解を深めた。



波戸岬少年自然の家での合宿の様子

1.6 留学生交流支援事業

1.6.1 短期留学生受入支援事業

(1) 令和元年度佐賀大学短期留学生受入支援事業（申請3件中2件採択）

No.	プログラム名	申請者	申請者 所属・職	交流大学・機関名	支援 人数	対象学生	研修期間	助成額
1	環アジア国際セミナー（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用に関わる建築・都市デザインワークショップ）（受入）	三島 伸雄	理工学部・ 教授	韓国交通大学（韓国）、タマサート大学（タイ）、チェンマイ大学（タイ）、カザフ建築土木アカデミー（カザフスタン）、アイントホーフエン工科大学（オランダ）、ウィーン工科大学（オーストリア）、タンリン工科大学（ミャンマー）	8	建築学部建築 学科他	9日間	560,000円
2	佐賀県地域における環境保全型・低平地農業および水産業の実地交流教育	小林 元太	農学部 教授	スリビジャヤ大学（インドネシア）	7	農学部	9日間	478,992円
合計					15			1,038,992円

【採択プログラムの成果報告】

1. 三島 伸雄 教授（理工学部）環アジア国際セミナー・建築都市デザイン国際ワークショッププログラム

肥前浜宿に6泊7日してディープに日本（特に佐賀地域）の伝統的集落の形成、町並みの特質、建築物を理解させることができ、かつ、学生同士がグループ作業で調査・提案を行うことができた。受け入れた学生の満足度も高く、目的・目標を十二分に達成させることができた。特筆すべき成果としては、以下の点に集約できる。1)

佐賀大学の重点国であるタイ・ミャンマーを含む6カ国7大学で建築・都市デザインを学ぶ多様な国籍の学生が集まって、短期集中で建築・都市デザイン提案をグループ作業で行い、交流を深めた点。2) プログラム責任者が研究で深い関係を有する佐賀県鹿島市肥前浜宿だからこそ、地域住民からの強力な協力を得て宿泊することができ、他では知ることができない日本の伝統的町並みと建築を深く学ぶことができた点。3) 短期集中ではあったが、それだからこそその町並みに対する提案作業を行い、その模型などを地域住民にも発表して共有することができ、今後の参考にしようということになった点。

昨年度よりも人数を絞って実施したことと、近年、町並みにできたゲストハウスを利用したため活動をスムーズに行うことができた。しかしながら、思った以上に費用がかさみ、参加費を上げないと来年度からの運営は困難であると考えられる。予算をどのように確保していくのか、また、無駄を省くのか、検討が必要である。

2. 稲岡 司 教授（農学部）佐賀県地域における環境保全型・低平地農業および水産業の現地交流教育

有明海のノリ養殖、低平地の環境問題、水問題の3つを大きなテーマとして研修を行った。佐賀大学での研究室訪問や講義、有明海上でのノリ養殖作業の見学や環境調査の観察、佐賀市の藻類プロジェクトや下水浄化施設、嘉瀬川ダムや「水ものがたり館」などで研修をおこなったほか、佐賀大学合宿研修所のある神集島にて、玄海の水産業について話を聞きながら、魚料理体験などを通して日本人学生や地元の人と交流した。全行程に日本人学生も参加した。

以上の研修をとおして、目的どおり、日本・インドネシア人学生双方が、互いの国の現状・教育環境・食文化・宗教的価値観などに関する理解を深め、低平地農業の現状や問題を把握して研究上の問題意識を高めることができたと考えられる。日本とインドネシアの双方の学生たちが、ホストとゲストの両方の役割を果たすことによって、生活環境を感じながら、お互いの文化的背景を理解した上での、真の交流が深まるばかりでなく、自国の農業や文化について客観的に考える機会が増したと考えられる。

プログラムの内容については、研修の初期の段階でスリウィジャヤ大学学生による、環境問題についてのプレゼンテーションを行うなど、受入れに対する工夫も重ねた結果、研修の成果は上がったと考えられる。今回は、佐賀大学の4研究室の教員が講義や説明を受け入れ、参加学生たちが大きな関心をよせていることから、今後の佐賀大学進学におおにつながると考えられる。また、今回は、研修中にスリウィジャヤ大学の農学部長も、両校の制度的な交流促進のために佐賀大学を来訪し、学生の研修にも一部参加した。学部長が実際の研修を視察することをとおして、今後、現地での佐賀大学生受入れの支援体制が充実することも期待される。

1.6.2 特別聴講生・特別研究学生等 学習奨励費支援事業

(2) 令和元年度佐賀大学特別聴講学生・特別研究学生等学習奨励費支援事業（採択5件）

No.	申請者	プログラム名	国名	出身大学	留学期間
1	Gunatilake Amuwela Appuhamilage Sumitha Vidushi	SPACE-E	スリランカ	ペラデニア大学	1年間
2	Hassan Sohan MD. Mauhmud	SPACE-E	バングラデシュ	チッタゴン工科大学	1年間
3	Jiang Ziqing	特別聴講学生 (一般)	中国	浙江理工大学	1年間
4	Ni Zhe	特別聴講学生 (一般)	中国	北京工業大学	1学期間
5	Meier Maria	SPACE-E	ドイツ	ハレ芸術デザイン大学	1学期間

2. 学生の海外派遣

2.1 本学学生の海外派遣概況

本年度の海外協定校等への学生派遣総数は228人であった。国際交流推進センターが設置された平成23年以降、派遣人数は増加し、近年は毎年約260～270人の学生を協定校等に派遣してきた。本学では全学生の5%を海外に派遣することを目標とし、(1) 留学プログラムのカリキュラム化、(2) 学部が実施する海外研修プログラムへの支援、(3) 国の海外留学支援制度獲得による学生の経済的負担軽減、(4) 交換留学希望者への語学力強化支援などを行ってきた。令和元年度は当初289人の派遣を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響から春季の短期プログラムの多くが派遣中止となり、計画していた派遣人数に届かなかった。令和2年度も引き続き新型コロナウイルスによる海外派遣への影響が続くと思われる。従って当面の間は、海外派遣に替わる教育機会をどのように創出できるかを模索し、学生の異文化への興味・関心を維持・向上させ国際性の涵養を養う取り組みの着手が期待される。

	留学の種類	派遣人数
①	派遣交換留学 (トビタテとの重複4名はトビタテで計上)	20
②	トビタテ-全国版	1(1)
③	トビタテ-佐賀地域人材コース	5(3)
④	短期留学(国際交流推進センター)	67
⑤	短期留学(学部・研究科)	123
⑥	短期留学(協定校サマープログラム等)	12
	計	228

() は内数で①派遣交換留学を兼ねたもの。

2.2 交換留学生の派遣

令和元年度はアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ドイツ、リトアニア、フィンランド、中国、台湾、タイ、スリランカ、オーストラリアの11カ国・地域に23人を派遣した。前年度より3人増加となった。近年の傾向として、大学院生による協定校等への研究留学の希望者が増えてきている点が挙げられるが、本年度はこれまでで最も多い7人の大学院生を海外に派遣し、派遣交換留学生全体の約1/3を占めた。これらの大学院は先進健康科学研究科、農学研究科、理工学研究科に所属する修士課程の学生でフランス、オーストラリア、イギリス、スリランカの協定校や連携機関に派遣された。いずれの学生も最大半年間、派遣先機関の研究室のメンバーとなり、多様な国籍からなるラボメイトと協力して研究活動に従事した。理系の大学院生のみならず、理系学部生の海外思考も近年強まる傾向にある。

もう1点の特徴として、以下の表で示す通り、昨年度に続きヨーロッパを留学先に選ぶ学生が多い傾向である。今年度は全体の半数以上を占め、特にリトアニアのヴィダウタスマグヌス大学とフィンランドのユバスキュラ大学に集中した。派遣された学生全員がトビタテ留学 JAPAN (全国版・地域人材コース)、JASSO 海外留学支援制度、本学独自の奨学金、校友会奨学金のいずれかの支援を受け、今年度も奨学金受給率100%となった。一方、本年度は後期に出発した学生らが新型コロナの影響で留学開始後2～3ヶ月で帰国を余儀なくされ、奨学金を約束された学生たちが不本意な形で留学を終えなければならず残念な結果となってしまった。途中帰国を命じられ

た学生は短期間で学習計画の変更や就職活動の開始などに適応せざるを得なかった。

学生が交換留学を実現させるための大きなハードルの一つが留学に必要な語学力を獲得することである。とりわけヨーロッパ、北米、オセアニアへの交換留学には TOEFL ITP や IELTS 等で高いスコアを得る必要がある。しかし効果的な学習方法を見つけたり、英語学習のモチベーションを維持することに多くの学生が苦勞する。そこで本年度4月よりオンラインの学習システム (Academic Express) を導入し、留学希望者及び留学派遣候補者のうち語学条件を満たしてしていない学生を主な対象として、システムの利用と毎週1回の対面による研修機会の提供を開始した。今年度派遣した学生23人のうち15人が基準スコアを満たし交換留学を実現した。語学力の問題は学生の主体性のみでは乗り越えることは難しいため、引き続きオンライン学習システムの活用ときめ細やかな指導が望まれる。

■過去5年間の交換留学派遣実績

派遣先大学	H27	H28	H29	H30	R元	過去5年間の累計
スリッパリーロック大学 (米国)	2	3	1	2	1	9
パシフィック大学 (米国)	1	1	1	0	0	3
ウィルフリッドロリエ大学 (カナダ)	0	0	0	1	0	1
マニトバ大学 (カナダ)	0	1	-	-	-	1
イーストアングリア大学 (イギリス)	0	1	0	0	0	1
オルレアン大学 (フランス)	1	0	2	0	1	4
ブルゴーニュ大学 (フランス)	1	0	0	0	1	2
バイオ産業大学 (フランス)	-	-	-	-	2	2
ドレスデン工科大学 (ドイツ)	0	2	1	2	0	5
ヴィダウタスマグヌス大学 (リトアニア)	1	2	2	1	4	10
ユバスキュラ大学 (フィンランド)	1	1	3	4	3	12
ハレ芸術デザイン大学 (ドイツ)	-	-	0	1	0	1
デザインアカデミーアイントホーフェン(オランダ)	-	-	0	0	1	1
北京工業大学 (中国)	0	6	1	3	0	10
浙江理工大学 (中国)	3	0	0	0	1	4
華東師範大学 (中国)	0	0	1	1	0	2
浙江科技学院 (中国)	0	0	1	0	0	1
国民大学校 (韓国)	4	4	0	2	0	10
大邱大学校 (韓国)	0	1	0	1	0	2
培材大学校 (韓国)	0	1	0	0	0	1
釜山大学校 (韓国)	0	0	1	0	0	1
全南大学校 (韓国)	0	1	0	0	0	1
国立政治大学 (台湾)	2	1	1	0	2	6
国立中興大学 (台湾)	1	0	1	0	1	3
国立台北大学 (台湾)	0	0	0	1	1	2
国立東華大学 (台湾)	1	0	1	0	0	1
タマサート大学 (タイ)	2	0	0	0	0	2
カセサート大学 (タイ)	0	0	2	0	2	4
チェンマイ大学 (タイ)	0	0	0	1	0	1

ペラデニア大学（スリランカ）	0	0	1	0	1*	2
ラトロープ大学（オーストラリア）	1	0	1	0	1	3
シドニー工科大学（オーストラリア）	2	1	0	0	0	3
南クイーンズランド大学（オーストラリア）研究室連携	-	-	-	-	1	1
ダンディー大学（イギリス）研究室連携	-	-	-	-	1*	1
計	22	26	21	20	23	113

* 1名の学生が2大学へ留学したため、派遣数1とカウントする。

■令和元年度に本学から派遣された交換学生（10カ国・地域 15大学 23人）

派遣国	派遣先大学名	所属	派遣時の学年	派遣期間	奨励金
アメリカ	スリッパリーロック大学	教育学部	2	令和元年8月～ 令和2年3月	校友会
フィンランド	ユバスキュラ大学	経済学部	3	令和元年9月～ 令和元年12月	校友会
		教育学部	3	令和元年9月～ 令和2年3月	佐賀大学奨励金
		教育学部	4	令和2年1月～ 令和2年3月	トビタテ留学 JAPAN (地域版)
リトアニア	ヴィタウタス・マグヌス大学	芸術地域 デザイン学部	3	令和元年9月～ 令和2年2月	校友会
		農学部	4	令和元年9月～ 令和2年2月	校友会
		芸術地域 デザイン学部	2	令和2年1月～ 令和2年3月	佐賀大学奨励金
		理工学部	3	令和2年2月～ 令和2年12月	校友会
フランス	オルレアン大学	先進健康科学 研究科	1	令和元年9月～ 令和2年2月	JASSO
	ブルゴーニュ大学	理工学研究科	1	令和元年11月～ 令和2年1月	トビタテ留学 JAPAN (地域版)
	バイオ産業大学	農学研究科	2	令和元年9月～ 令和2年1月	フランス政府 奨学金
先進健康科学 研究科		1	令和元年9月～ 令和2年2月	JASSO	
オランダ	デザインアカデミー アイントホーフェン	芸術地域 デザイン学部	3	令和2年2月～ 令和2年3月	トビタテ留学 JAPAN (地域版)
中国	浙江理工大学	経済学部	2	令和元年9月～ 令和2年1月	JASSO
台湾	国立政治大学	経済学部	2	令和元年9月～ 令和2年2月	JASSO
		経済学部	2	令和2年2月～ 令和2年3月	JASSO
	国立台北大学	経済学部	2	令和元年9月～ 令和2年1月	JASSO
	国立中興大学	農学部	3	令和元年9月～ 令和2年1月	JASSO
タイ	カセサート大学	経済学部	2	令和元年9月～ 令和2年1月	校友会
		経済学部	3	令和2年1月～ 令和2年3月	JASSO
スリランカ/ イギリス	ペラデニア大学/ ダンディー大学	先進健康科学 研究科	1	令和元年9月～ 令和2年2月	JASSO

オーストラリア	南クイーンズランド大学	理工学研究科	1	令和元年8月～ 令和元年9月	JASSO
	ラトロープ大学	教育学部	3	令和2年2月～ 令和2年12月	校友会

佐賀大学奨励費：佐賀大学学生海外派遣奨励金（1年間30万円、1月期間15万円（一時金））

校友会：佐賀大学校友会学生派遣奨励金（1年間30万円、1学期間15万円（一時金））

JASSO：JASSO 海外留学支援制度（韓国・タイ7万円、中国・台湾6万円、（月額））

フランス政府奨学金：600ユーロ（月額）・往復渡航費

2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣

「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」は平成26年度に開始した官民協働で取り組む海外留学支援制度で、希望学生は大学を通じて申請を行う。海外協定校が提供する教育プログラムに参加する交換留学とは異なり、留学先は大学に限定されず、また現地での学習や実践活動を自ら計画しなければならない。独創的な留学計画を立てられるが、アイデアを計画書という形にする作業に苦勞する学生多い。自主性や積極性だけでなく、インターパーソナルコミュニケーションや問題解決能力などが計画書作成時にすでに求められている。本学では、第1期に3人の学生が採択され、インド・ケニア、インドネシア、ミャンマーへの留学を実現させた。令和元年度は7件の応募に対し2件が採用となった。

■令和元年度の採用留学生（計2件）

留学期間	学部・研究科	学年	派遣先国	コース	留学計画のタイトル
平成31.4～令和2.1	先進健康科学研究科	1	ドイツ	理系、複合・融合系人材	糖尿病とその原因となる環境刺激との関係の解明
令和2.3～令和2.11	農学部	3	カメルーン 中国	理系、複合・融合系人材	江戸時代の稲作と先端技術を用いた土壌の評価を通して稲栽培のエキスパートになる！

※内容は採用時点

2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)

SUSAP 佐賀大学短期海外研修プログラムは、平成25年年度より本格的な実施を開始した全学の学生を対象とする短期の留学プログラムである。本プログラムは、外国語の運用能力を高めるだけでなく、海外協定校等での講義や現地学生・海外からの留学生との共同活動や意見交換、一般市民との交流を通して、現地の社会や文化、生活習慣を学び、多様な文化や価値観を理解するとともに、国際的な視野を育むことを目指している。令和元年度は新型コロナ感染拡大の影響により計画していた10プログラムのうち、春季の3プログラムが中止となった。最終的に本年度は7プログラムを実施し、7カ国・地域の7大学に67人を派遣した。

■令和元年度実施のプログラム

SUSAP 2019 Summer	国・地域	期間	派遣人数	単位付与	語学条件 (TOEIC IP)
大邱大学校プログラム	韓国	3週間	10	あり	450以上(奨学金受給条件)
浙江科技学院プログラム	中国	2週間	8	あり	500以上(奨学金受給条件)
ラトロープ大学プログラム	オーストラリア	5週間	13	あり	550以上(奨学金受給条件)
UM iCamp マラン大学プログラム	インドネシア	2週間	7	あり	550以上(奨学金受給条件)
ハノイ外国語大学プログラム	ベトナム	2週間	7	なし	550以上(奨学金受給条件)
計			45		

SUSAP 2020 Spring	国・地域	期間	人数	単位付与	語学条件 (TOEIC IP)
東華大学プログラム	台湾	5週間	10	あり	英語で専門科目を履修する場合は580以上
パシフィック大学プログラム	アメリカ	3週間	12	あり	430以上
計			22		

参加者の傾向を以下に述べる。例年と同様、学部1～2年生が参加者の大半を占め、今年はこれまでに最も高い97%を占めた。また所属学部別では、最も多い順で経済学部18人、理工学部・理工学研究科14人、農学部13人、教育学部10人、芸術学部7人、医学部5人となった。また参加学生への経済的支援は、派遣先大学の授業料免除、佐賀大学独自の奨学金（最大10万円）とJASSOの海外留学支援制度（6～7万円）の3つがあり、条件を満たした学生にいずれかが支給した。今年度の奨学金（授業料免除を含む）受給率は87%であった。以下に令和元年度に国際交流推進センターが実施した7つのプログラムの概要を紹介する。

2.4.1 大邱大学校プログラム（韓国）

■概要

大邱大学校への学生派遣は今年で7回目となった。海外協定校の学生を対象として毎年開催されるサマープログラムで、1日3時間の韓国語授業参加と韓国文化体験、大邱やその近郊の街への視察などが組み込まれている。出発前の事前研修の一環として、毎年大邱大学校国際関係学科からの訪問団（学生18名、教員1名）を受け入れており、今年度も両国の学生生活の違いについて英語・韓国語・日本語によるディスカッションを行い、終了後、食事をしながら交流した。大邱大学校での研修は、韓国語研修が主軸となっている。言語能力別に分けられ、経験豊富な韓国人講師が韓国語のみを使って授業を行っており、本学学生の評価は非常に高い。短期留学を通して学習意欲を高め、帰国後も独学で韓国語学習に励んだり、交換留学を目指す学生が多い。本年度の特徴として韓国語を独学で身につけている学部1年生が複数名参加していたことである。高校生の時に韓国のポップカルチャーに関心を持ち、韓国のドラマや音楽に親しみながら言語を習得していた。このような学生たちにとって、本プログラムは少し「ぬるま湯」であったというフィードバックがあった。その背景には、プログラムの主な対象を日本人としていることや、実施が韓国の夏休み期間中であることなどから、日本人学生同士の行動が中心となってしまっている傾向が挙げられる。韓国語能力が高い学生の参加希望者が今後も増える可能性があるため、現地学生との密な交流の機会を増やす工夫が期待される。

経済的な支援については、本プログラムの参加者全員がJASSO海外留学支援制度（3名）と佐賀大学奨学金（7名）のいずれかを受給した

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 令和元年8月7日～24日（3週間）

■単位付与 海外交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 10人

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	2年	2
経済学部	1年	4
医部	1年	2
農学部	2年	2



修了式



大邱大学生との交流

2.4.2 浙江科技学院プログラム（中国）

■概要

本プログラムは中国の浙江科技学院が毎年実施するサマープログラムで、今回で4回目の派遣となる。浙江科技学院はドイツの大学との間でダブルディグリーなどを含む学術交流を数多く展開しており、プログラム参加者の半数以上はドイツ人学生が占めている。本学学生はこれらの学生とともに中国語、中国文化の講義、文化体験や視察など様々な活動に参加した。プログラムは全て英語で行われ、現地教員や中国人ボランティア学生とのコミュニケーションも英語を使用した。現地のボランティア学生は英語に堪能であり交流の機会はあるものの、学生スタッフという位置づけのためか、親密な関係を築きにくかったようである。中国社会や中国文化を深く理解するという観点からは、少し物足りなかったかも知れない。しかし帰国後の言語化活動からは、ドイツ人学生に対して積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿や、文化の違いによる葛藤や衝撃を繰り返しながら人間関係を構築している様子が見え、参加学生にとって貴重な学びの機会であったと考える。また現地で人々と関わりながら社会を観察することで、出発前に抱いていた中国人や中国社会に対する限られた知識や偏見について気づきを得ると同時に、日本社会や自分自身を客観的に捉え直すことができていると思われる。事後研修では、新学期へ向けての意欲的な姿勢を見せており、多様な考えや価値観を持つ同世代との密な交流の意義を参加学生自身が実感していた。

本プログラムに参加した全ての学生が浙江科技学院による授業料免除の支援を受けた。これに加え3名がJASSO 海外留学支援制度奨学金、4名が本学の助成金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 令和元年8月12日～26日（2週間）

■単位付与 海外交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 8人

学部・研究科	学 年	人 数
教育学部	2年	1
医学部	2年	1
理工学部	1年	2
理工学部	2年	1
芸術地域デザイン学部	1年	1
農学部	1年	2



カンフー体験



ドイツ人学生と街を散策

2.4.3 ラトロープ大学プログラム（オーストラリア）

■概 要

ラトロープ大学キャンパス内にある語学学校で実施されている英語コースに13名を派遣した。本プログラムは今年度より単位化が認められ、履修登録を行った学生は「海外交流実習」2単位が付与された。他のプログラムと異なり、留学期間が5週間と長く、授業料、渡航費、現地生活費が高額であることなどから派遣学生数はそれほど多くないと想定していたが、昨年度より倍増し13人となった。本プログラムでは学生の英語能力に応じて、適切なレベルのクラスに配置され、週20時間の授業に参加する。さらに学生はアカデミックライティング、演劇英語、IELTS 準備講座、仕事の英語など様々なワークショップに参加することができるようになっている。本プログラムの特徴の一つは、現地学生との交流の機会が豊富である点である。ラトロープ大学の日本語教育の教員と連携し、日本語の授業に参加している現地学生、日本クラブのメンバーを対象にバディを募りマッチングをしている。本学学生1名につき2名のバディが配置された。バディの中には日本への留学予定者や既に交換留学から帰国した学生も含まれ、放課後や週末に共に時間を過ごし活発な交流ができた。両大学の学生にとって有意義な5週間となり、とりわけ本学の学生には英語力向上のみならず、多様なバックグラウンドを持つオーストラリア人学生との交流を通してオーストラリア社会や文化に対する理解を深めることができた。

本プログラムの参加者のうち基準を満たした学生8人に対し本学より10万円の奨学金を支給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 令和元年8月21日～9月28日（5週間）

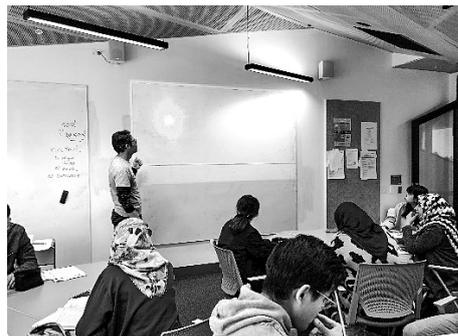
■単位付与 あり

■参加学生 13人

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	3 年	1
理工学部	1 年	3
農学部	1 年	1
農学部	2 年	3
教育学部	2 年	4
芸術地域デザイン学部	2 年	1



クラスメイトと街の散策



授業風景

2. 4. 4 UMiCamp マラン大学プログラム (インドネシア)

■概 要

本プログラムはインドネシアのマラン国立大学が毎年8月に世界各地から学生を招き、実施しているサマープログラムである。プログラムを通してインドネシア社会の多様な側面について理解を深めることが目的である。プログラムは教育活動と社会・文化活動をバランスよく組み込んでいる。市民性の醸成に繋がるような村落コミュニティでのホームステイやボランティア活動などが特色である。また現地のインドネシア人学生の貢献が非常に大きく、日本の大学であれば教職員が担当するようなアクティビティの指導やモデレーターを務める。本プログラムでは海外からの留学生やインドネシア人学生だけでなく、一般市民との交流機会も提供されている。本学学生は日本以外の出身学生と2名1組で農家にホームステイをした。UMiCamp終了後は、例年と同様マラン国立大学の理工学部が本学学生のみを対象に3日間の研修を実施した。本学学生は大規模教室にて多くの理工学部生を前に佐賀大学や佐賀に関するプレゼンテーションを英語で行い、書道のワークショップを行なった。またこの期間中、学生は理工学部教員宅に滞在し、農村と都市の暮らしぶりの違いも学ぶことができた。

本プログラムに参加した学生のうち、理工学研究科の学生1人はマラン国立大学よりプログラム費の免除を受けた。ほかに5人がJASSO 海外留学支援制度の奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授 (国際交流推進センター)

■実施期間 令和元年8月14日～27日 (2週間)

■単位付与 あり

■参加学生 7人

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1年	3
経済学部	2年	1
農学部	2年	1
教育学部	2年	1
理工学研究科	M1年	1



オープニングセレモニー



多様な国籍の学生との登山

2.4.5 ハノイ国家大学外国語大学プログラム（ベトナム）

■概 要

本プログラムはハノイ国家大学外国語大学が佐賀大学の学生のみを対象として開講するプログラムで、本年度初めて実施した。研修は経済的につながるの強いベトナムについて、言語や文化、歴史などを中心に理解を深めようというもので、午前中に2時間半のベトナム語授業を受講し、午後はバディと市内の主要な歴史的・文化的価値のある場所を訪れ、言語の学生から解説を受けるという構成であった。最終日は学習したことについて英語でプレゼンテーションを行うというタスクも与えられていた。本学学生のバディとなるベトナム人学生は日本語学科に所属しており、本学の学生との交流に積極的で日本語学習意欲が非常に高かった。またハノイ国家大学外国語大学には本学の大学院を修了した卒業生が多く教鞭をとっているということもあり、現地教員によるきめ細やかな支援も行われた。わずか2週間のプログラムではあるが、積極的な現地学生や教職員との密な交流を通してベトナムの人々の暮らしや価値観などを理解することができたのではないかと考える。

本プログラムの参加学生7人のうち、4名がJASSO 海外留学支援制度奨学金、1名が佐賀大学奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 令和元年9月15日～29日（2週間）

■単位付与 なし

■参加学生 7人

学部・研究科	学 年	人 数
芸術地域デザイン学部	1年	2
芸術地域デザイン学部	2年	2
経済学部	2年	1
理工学部部	1年	2



ハノイ大学のバディと



オープニングセレモニー

2.4.6 国立東華大学プログラム (台湾)

■概要

平成27年度に開始した台湾・国立東華大学への1ヶ月間の派遣プログラムは本年度で5年目となった。今年度は10名を派遣した。本プログラムは英語で提供されている専門科目や教養科目を約1ヵ月間履修するもので、半年あるいは1年間の通常の交換留学と同じ経験が得られる。授業時間数は1週間あたり最低20時間とし、自分の関心のある教養科目や各々の専門分野の授業を組み合わせ受講する。出発時の英語能力が十分でない場合は、英語や中国語の語学の授業を中心に受講する。また学生には1人ずつ現地学生バディがつき、1対1の親密な交流も行うことができる。このように各自の授業スケジュールや履修する科目、放課後の過ごし方も自然と異なるため、同じ寮に滞在しても、常に佐賀大学生同士で行動するのではなく、主体的に行動することができる環境であった。東華大学の授業は、教員と学生あるいは学生同士のインタラクティブな対話で展開され、本学学生もディスカッションやプレゼンテーションをする機会に多く恵まれた。その結果、帰国後の振り返り授業では、これまでの自らの受動的な学習姿勢を省みる学生が多かった。また現地学生の高度な英語コミュニケーション能力を指摘し、その背景には何事にも積極的に取り組んでいることが要因ではないかと気づく学生も多くいた。

本プログラムの参加者全員が、東華大学からの授業料免除と JASSO 海外留学支援制度奨学金の支援を受けた。

■担当教員 山田 直子 准教授 (国際交流推進センター)

■実施期間 令和2年2月20日～3月22日 (32日間)

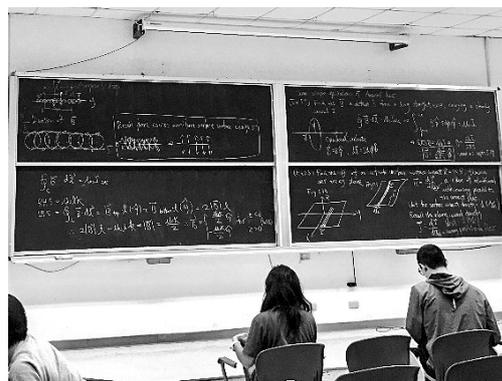
■単位付与 海外交流実習 (基本教養科目) 2単位

■参加学生 10人

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1年	1
経済学部	2年	2
農学部	1年	2
医学部	2年	1
理工学部	1年	1
理工学部	2年	2
教育学部	2年	1



台湾の伝統文化の授業にて



専門の授業を英語で受講

2.4.7 パシフィック大学プログラム (アメリカ)

■概要

本プログラムは、アメリカのパシフィック大学において学術英語のコースに参加するものである。プログラムの目的は、英語圏の留学に必要な高度な英語能力を身につけること、また現地学生や市民との交流を通して、アメリカの学生生活や制度、アメリカ社会や文化について学ぶことである。パシフィック大学の特色ある教育プログラムはサービラーニングに力を入れており、英語を学ぶ短期の留学生に対しても希望に応じて機会が提供される。本学学生も期間中に3回、小学校でのボランティア活動など地域社会での活動に参加し、アメリカの大学で積極的に実践されている市民性を涵養する教育を体験することができた。英語の授業はレベル別、技能別に行われており、1週間に約15時間受講した。またコミュニティエンゲージメントは1週間に4時間参加した。前年度は参加者の大半が中上級から上級の英語能力レベルで日本人のみのクラスメートの授業が物足りなさを感じさせるものとなっていたが、今年度は参加に必要な語学条件を TOEIC430まで下げ、研修期間を2週間から3週間に拡大することで学生のプログラム満足度を上げることができた。参加学生全てが佐賀大学からの奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授 (国際交流推進センター)

■実施期間 令和2年2月21日～3月16日 (3週間)

■単位付与 海外交流実習 (基本教養科目) 2単位

■参加学生 12人

学部・研究科	学 年	人 数
教育学部	1年	1
教育学部	2年	2
理工学部	1年	1
理工学部	2年	1
医学部	1年	1
農学部	2年	2
経済学部	1年	2
経済学部	3年	1
地域デザイン学部	2年	1



お世話になった先生方と



サービスマーケティングで植樹活動

2.5 学生の海外派遣支援（国際化支援制度）

2.5.1 令和元年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成

番号	派遣先	支援人数 (参加学生数)	期間	プログラム名	助成額
1	韓国 大邱大学校	7 (10)	令和元年8月7日～ 令和元年8月24日	大邱大学校プログラム	350,000円
2	中国・浙江科技学院	4 (8)	令和元年8月12日～ 令和元年8月26日	浙江科技学院プログラム	200,000円
3	ベトナム・ ハノイ国家大学外国語大学	1 (7)	令和元年9月15日～ 令和元年9月29日	ハノイ国家大学外国語大学 プログラム	50,000円
4	オーストラリア・ ラトロープ大学	8 (14)	令和元年8月21日～ 令和元年9月28日	ラトロープ大学プログラム	800,000円
5	マレーシア・ トゥンフセインオン マレーシア大学	キャンセル	令和2年3月8日～ 令和2年3月20日	English and Cultural Training Program in Malaysia	636,881円 (飛行機キャンセル料、 空港前泊キャンセル料)
6	アメリカ・ パシフィック大学	12 (12)	令和2年2月21日～ 令和2年3月16日	パシフィック大学プログラム	960,000円
7	リトアニア・ ヴィタウタスマグヌス大学 フィンランド・ ヘルシンキ大学	キャンセル	令和2年3月3日～ 令和2年3月16日	リトアニア・ フィンランドプログラム	788,508円 (Wifi等キャン セル料、飛行機キャンセル 料、プログラム代補填)
小計		32 (68)			3,785,389円

2.5.2 令和元年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

番号	所属	学年	指導教員	留学先	留学期間	助成額
1	教育学部	3	石井 宏祐	フィンランド・ ユバスキュラ大学	9ヶ月	300,000円
2	芸術地域デザイン学部	2	中村 隆敏	リトアニア・ ヴィタウタスマグヌス大学	5ヶ月	150,000円

【帰国留学生の報告】

ユバスキュラ大学大学（教育学部）

留学したことで、英語力の向上し、フィンランドにおける進んだ教育を自分の目で確認できました。長期留学に挑むことはとても勇気がいることだと思うが、恐れずに勇気を出して挑んでほしいと思います。

ヴァイタウスマグヌス大学（芸術地域デザイン大学理工学部）

コロナの影響で途中帰国することになり、2ヶ月間という短い留学生活でしたが、様々な経験を経た今、視野が広がり思考が柔軟になったと私は感じています。日本国内では決して得ることのできない貴重な体験が数多くできるので、興味のある人は是非留学して欲しいです。最後に、交換留学という素晴らしい機会を与えてくださった方々に心から感謝しています。

2.5.3 令和元年度佐賀大学学生海外研修支援事業（申請8件中7件採択）

No.	所属	プログラム名	申請者	派遣国	支援人数	研修期間	助成額
1	理工学部	環アジア国際セミナー（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用にかかわる建築・都市デザインワークショップ）	三島 伸雄 教授	オーストリア	キャンセル	8～22日 （行先により異なる）	0円
2	医学部	ハワイ大学臨床推論ワークショップ	小田 康友 教授	アメリカ	2	8日間	100,000円
3	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America（夏）	Peter Roux 講師	アメリカ	8	12日間	400,000円
4	経済学部	国際交流実習「グローバル化における中小企業の役割～日本とタイの経験を中心にして」	サリヤ デイ シルバ 教授	タイ	7	8日間	350,000円
5	経済学部	中国経済実習	谷 晶紅 准教授	中国	8	8日間	400,000円
6	理工学部	アジアハウジングワークショップ	宮原真美子 准教授	マレーシア	4	8日間	200,000円
7	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America（春）	Jonathan Moxon 講師	アメリカ	キャンセル	12日間	0円
合計					29		1,450,000円

【採択プログラムの成果報告】

1. 小田 康友 教授（医学部）「ハワイ大学臨床推論ワークショップ」

令和元年8月に、医学部医学科4年次4名が参加し、計画通りの派遣を実施できた。参加した臨床推論ワークショップには、本学以外にも全国から日本人医学生30名ほどが参加し、協働・競合的環境でハワイ大学方式のPBLを経験することができた。また、米国人模擬患者に対して医学英語を用いた医療面接を実施し、シミュレーターを用いた全身管理、注射手技を経験する機会もあり、実践的な医療手技も学習することができた。参加者は、いずれも臨床医学および国際的コミュニケーションにおいて多くの経験をし、今後の自己学習に対してのモチベーションが高まって帰国した。以上のことから、本プログラムの目標とする、臨床推論を系統的に学習すること、英語環境下で講義をうけ議論をおこなうことで医学英語能力を向上させ、将来国際的に活躍できる医学生を育成すること、さらには国際的観点から日本の医学教育や医療を見つめなおし、将来我が国で必要とされる医療について考え学習することは、いずれも十分に達成できたと評価した。臨床推論について医学知識と臨床技能を結びつけながら系統的に学習することで、帰国後も自身の学習方法が明確にできたことである。患者の症状から

診断に至るまでにどのような鑑別診断を考えて必要な診察や検査を組み立てていくのかをシナリオに基づいて学習できた。禁煙指導のロールプレイでは、患者の生活背景を加味しながら、患者に適した生活指導を行う体験を通して、海外の患者に診察を行う模擬体験を経験できた。

次に、日本と米国の医学教育カリキュラムや学習モチベーションの違いを比較することができ、今後の学習目標を具体的に設定することができた。とくに医学英語能力と英語によるコミュニケーション能力は、将来国際的に活躍する医師として必須な能力である。すべての参加者が、プログラム参加中に英語能力を向上することができ、さらに今後も継続して学習することを目標に掲げていた。プログラムの内容に関しては、参加者が獲得した学習内容を、参加者個人の成果にとどめることなく、佐賀大学の医学教育改革に還元するための方略を検討して実施することが今後の課題である。本学医学部は、今年度、国際基準に基づく医学教育認証評価制度の受審を予定しており、カリキュラムの質向上と臨床実習の充実化を行うために、ハワイ大学のカリキュラムが大変参考となっている。

2. Peter Roux 講師（全学教育機構）「Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America」

本プログラムでは、以下の2つの目的を設定している：①2週間のミニ留学体験を通して、長期留学へつなぐ。②ホームステイ、アメリカの学生との交流、ニューヨークでのフィールドワークを通して、グローバルな視野の育成を行う。このプログラムを通じ、学生が学業における目標を設定し、英語がもっと流暢になりたいという気持ちを持つことができた。

また、佐賀大学とスリッパリーロック大学間での研究交流・職員交流に向けた機会も持つことができた。

3. Saliya De Silva 教授（経済学部）「国際交流実習「グローバル化における中小企業の役割～日本とタイの経験を中心にして」

本プログラムの目的は、グローバル化する国際社会の諸相を多面的に考え、問題解決に積極的に関与できる資質を涵養することにある。そのためには、学生が本学で学んだ経済学の専門的な知識を発展させる機会の獲得が不可欠であり、発展途上国の経済発展の現状とそれらの国々が直面する諸問題について学生自らが経験を通して学べるように、現地の専門家の英語による講義の受講や調査活動、現地住民や学生との意見交換等の機会を組み込んだプログラムを提供することである。

今回の研修課題を「グローバル化における中小企業の役割」とし、事前研修では佐賀県や県内中小企業、海外実習ではカセサート大学の協力のもと、講義や調査の機会を与え、英語で具体的事例を比較的に考察させることで、学生は国際社会で出現している様々な事象について多面的に捉える機会を得、英語による発表等を通して表現能力の向上を身につけることができた。また、学生が学問的な成果を獲得するだけでなく、訪問国の文化や言語、習慣、宗教、民族を理解するで「相互理解」を基本とする国際交流の発展に貢献できるような人材に成長できる意識づけができた。

本プログラムは、研修課題について佐賀を中心に事前学習をし、カセサート大学で英語で発表する。海外実習ではカセサート大学の教員による講義や学生の発表、現地調査などを通して、お互いが直面する諸問題について知識を共有し具体的事例を比較的に考察することができた。帰国後は、市民を対象にタイで学んだことを報告した。これらの一連の内容が、その後、交換留学や海外の大学院進学、さらには国際関係の職場に就くという進路進学の国際活動への動機づけという点で有意義な成果を挙げている。

4. 谷 晶紅 准教授（経済学部）「中国経済実習」

プログラムの目的・目標を概ね達成することが出来た。アリババ本社の見学、パナソニック杭州、中国達利シルク会社の見学、キャッシュレス・無人店舗の体験などを通して、学生たちは中国経済に対する理解を深めるこ

とができた。現地での行動中に、学生達は積極的に新しい中国語の単語（左側、右側、石鹸など）を学んでおり、日本に戻ったら中国のドラマなどを見るなどを通して、もっと中国語を勉強したいと、抱負を語っていた。また、日本語学科や経済学専攻の学生たちとの交流を通して、グローバル化した世界において、自らのアイデンティティを持つと共に、自分とは違う相手のアイデンティティを正しく理解することの必要性を、学生たちは認識できるようになった。

特筆すべき成果は2つあげられる。1つは、プログラムに参加した学生のうちの何名は今回の実習を通して、留学や外国語の学習を頑張ろうと考えるようになったことである。浙江理工大学の英語による専門科目の受講や、日本、ドイツ、アフリカ、韓国などの国・地域から留学生たちとの出会いは影響が大きかったと思われる。2つ目は、実習前と比べ、学生たちが異なる文化・歴史・価値観・経済体制を正しく理解し、お互いの相違を受容できるようになったことである。

5. 宮原 真美子 准教授（理工学部）「アジア・ハウジングワークショップ」

ワークショップは、イギリス統治時代1950年前後共産党の武装蜂起に対して華人を強制的に集住させるために450箇所ほど形成された新村のひとつ Salak South を対象に、5つのテーマ“Typological Renovation”, “Road Infrastructure”, “Water-based Landscape”, “Flora based Landscape”, “Community Anchor Facilities”に分かれての提案をした。佐賀大学生にとって、普段の設計の授業ではしっかりと取り組めていない site survey や diagram 表現、プレゼンテーションのスキルを、他の大学・学年の学生と英語で議論しながら学ぶ良い機会となった。何より、現地の学生とのワークショップは、マレー人、華人、インド人など、ひとつの都市マレーシアで人種・宗教により明確にみ分けをしながら多文化共生しているマレーシアの実態を肌で感じる経験であったと思うし、既存の社会問題に対してデザインする意味を学ぶ機会になったと思う。

今回のワークショップでは、対象敷地の町人と大学での発表と2回の成果発表を行った。対象敷地の Salak South 地区の公民館で展示では、パネルディスカッション形式で成果発表を行い、村の住民、マレーシアの建築家から直接フィードバックを得られたという点で、実際の設計の仕事に近い体験があった。また、住宅局の大臣をお招きし、具体的に提案を実現していくプレゼンテーションを行うことができた。一方、大学では、建築・ランドスケープ、都市計画の専門家から教育的な視点でのフィードバックがあった。専門家、利用者とは異なる視点からのコメント（時に異なる評価もあり）は学びが大きかった。

3. キャンパスの国際化

キャンパスにおける多文化共生、とりわけ留学生と日本人学生の互恵的な関係を創出することを目指して、国際交流推進センターでは多様な活動を展開している。平成25年より異文化への理解と高いコミュニケーションスキルを備えた学生を「佐賀大学グローバルリーダーズ」として採用し、国際交流推進センター・国際課とが協働しキャンパスの多文化共生につながる取り組みを行なっている。メンバーには留学生も半数含まれ、留学生が常に「支援される側」として位置付けられるのではなく、キャンパス・コミュニティの構成員としてより良い環境をつくるために活躍・貢献してもらうことを意図している。

今年度はこれまでの活動を再評価し、留学生と日本人学生の関係性が平等であるか、留学生・日本人学生の双方が期待する「親密な友人関係」に発展できるような効果があるかを学生リーダーと共に精査した。前年度の活動をそのまま踏襲するのではなく、これまでとは異なるアプローチで新しい活動を実施することになった。新たな取り組みは Big Coffee Hour（5月、6月）、One Day Trip（4月、10月）、ムービーナイト（11月）、佐賀街歩き（9月）である。Big Coffee Hour は留学生、日本人学生のどちらにも敷居が低く気軽に参加できる交流の機

会になるように心がけた。特定の国の言語や文化に焦点を当てずに、コミュニケーション言語を自由とすること、また言語の障害を意識せずに一緒に楽しむアクティビティを入れた。続いて One Day Trip および佐賀街歩きは、いずれも新入留学生が日本人学生や先輩留学生とのネットワークを築くことを意識して国籍をミックスしたグループでのゲームをたくさん行った。交流を求める日本人学生にとっても、佐賀を紹介するというアクティビティと一緒に食事を作って食べる等の活動を通して自己開示を促し、心理的障壁を小さくできると考えた。さらに今年度はスマホアプリを活用し、参加者のフィードバックを回収し期待した効果があるのか、改善点はどこにあるのかを学生メンバーとともに検討し、次の活動に反映させるように心がけた。今年度は上記の活動のほか、毎年恒例のカルチュラルナイト、留学生ウェルパーティ、オープンキャンパスでの高校生向け交流ラウンジ、ピアサポート活動などを実施した。



One Day Trip 祐徳稲荷神社（4月）



Big Coffee Hour（5月）



ムービーナイト（11月）

Ⅲ. 研究者交流

国際交流推進センターにおける従来の「国際研究者交流事業」は、研究者個人のつながりのみに依存し、継続性と組織的推進に課題があったため、平成30年度からは、国際交流の現状分析に基づく部局単位の国際交流のビジョン・方針を策定することとし、部局のビジョン・方針に沿った研究者交流等の事業を支援することとした。

以下は、令和元年度に支援対象となった事業の成果である。

令和元年度佐賀大学国際研究者交流事業

～～当初募集分～～

【芸術地域デザイン学部】

「佐賀・韓国から提案する<21世紀新アート・デザイン>」

●事業概要

・セラミック分野を中心とするアート・デザイン分野の共同研究。具体的には、佐賀大学芸術地域デザイン学部の有田セラミック分野が有するハード・ソフト両面における強くなりソースと国民大学校デザイン学部のもつ前衛的なデザイン力と表現力を研究者交流によって融合させ、佐賀・韓国から世界に向けて新しいデザインの可能性を提案し、研究成果を発信する。

・30年度から毎年、両校からそれぞれ2名程度の研究者を相互に派遣。令和元年度はキックオフイベントとして、両校でワークショップ、レクチャーを実施した。韓国国民大学校においては、本学部の三木講師が講演を行い、佐賀大学においては有田キャンパスで朴 重元氏による特別講義を行った。

●相手国・相手機関 韓国・国民大学校

●支援額 240千円

●国際共同研究の成果

第3期中期計画にある研究者交流の30%増加を目標とし、本事業をスタートさせる。また、本事業はアジアの大学との交流を推進する同中期計画に則り、計画・実施するものでもあり、研究者交流の点で実績を作った。

本事業は、芸術地域デザイン学部の最大の強みである有田セラミック分野をセラミック研究・教育の国際的学術拠点とする事業計画の中心になるものと位置付けて推進しており、昨年度に引き続き研究者交流を行い、また肥前セラミック研究センターの韓国窯業技術院との研究協力と併せて、韓国の教育研究機関との学術交流を進展させた。

●次年度以降の取組予定

韓国を起点にしっかりとアジアのネットワークを築き、肥前地区の技術と機能が有効な発展につながる様に交流関係を構築する。また、ファインアート、工芸（漆工芸、染色工芸）、建築都市設計、キュレーションその他の分野も順次、本事業に参画予定している。研究者、学生がお互いの国で行われる国際コンペティション、研究会等に応募することを進める。

【芸術地域デザイン学部】

「イクロム夏期セミナー：文化財の保存と科学のためのコミュニケーションと教育スキル」

●事業概要

令和元年9月9-20日に佐賀大学有田キャンパスにてイクロムの夏期セミナーを佐賀大学有田キャンパスで実施した。本セミナーは本部ローマを離れて実施される初の海外開催であり、カナダのアサバスカ大学（通信制大学）と連携した初のデジタル学習と経験の広い共有を取り入れ、講師、参加者24名、20カ国から集い、2週間有

田の民宿に宿泊した。本セミナーにより文化財の保護に携わる専門家の人材育成を通じて、国際的なネットワークの構築という成果ができた。また、セミナー期間中に出したごみを計量したり、紙媒体の資料を極力減らしたりするなど国連のSDGs目標に向け、イクロム初の「ゼロ・ウエースト」国際研修を実行した。

●相手国・相手機関 ユネスコ系非政府機関イクロム（国際文化財保存修復センター、ローマ）セミナー参加者は16か国

●支援額 328千円

●国際共同研究の成果

芸術・文化により、地域を志向した社会貢献・教育・研究を推進することで地域活性化の中核的拠点を目指す、国際的視野から地域の活性化に貢献するというビジョン、更に有田町との連携事業の一環になるなど今回の取り組みによる成果は非常に大きかった。

佐賀の窯業という最大の特徴を生かし、その中心である有田にある有田キャンパスで、有形無形の文化財が身近にある文化遺産コンパクトシティーの強みを生かして、参加者である各国の研究機関、教育機関に勤務する専門家が、2週間有田町に宿泊した研修であり、町内のフィールドワークや郷土料理を作る体験学習及びレセプション等により地域とのつながりが深まり、地域の人々をはじめ、見学先等との良好な関係を持った。特に有田キャンパスでは参加者による一般公開フォーラムも開催し、国際的な研究に寄与した。

●外部資金獲得の成果

金子財団50万円、佐賀県観光連盟50万円、鹿島美術財団50万円、日本教育公務員弘済会15万円、奨学寄附金50万円（㈱戸上電機グループ、㈱サガテレビ）

●次年度以降の取組予定

次年度以降は、今回の参加者との研究者交流のさらなる発展につなげる。最終目標は本事業で構築したグローバルなネットワークを通じた共同研究、学生や教員の交流事業の実施による佐賀における文化遺産の保護と地域の持続的発展であるが、まず共通の課題についてセミナーで得たネットワークとデジタル教材のノウハウを生かして、インターネット上で交流を進められるような事業を進展させる。

【農学部】

「ベトナムにおける健康機能性ヤマイモ（トゲドコロ）の高収量栽培技術の確立に関する基礎的研究」

●事業概要

ベトナム・カントー大学と、健康機能性ヤマイモ（トゲドコロ）の栽培分野に関する共同研究を行う。2019年8月に本学から教員2名を派遣し、令和元年10月にカントー大学とアンザン大学から教員各1名のほか現地農家2名を受入れ、共同研究を通して、同作物の安定生産と有効な健康機能性成分の含有量を高める現地での栽培技術の開発を目指す。併せて、本学の学部学生2名、大学院学生1名を派遣し、現地学生と意見交換を通して、当該作物の栽培分野の理解を深めさせる。

●相手国・相手機関 ベトナム・カントー大学農村開発学部

●支援額 273,688円

●国際共同研究の成果

令和元年度の当事業に関して、鄭教授、原口准教授、辻准教授が現地調査を実施し、日本人博士課程学生1人と同学士課程学生2人も現地調査補助と学生交流を行った。

今年度採択され来年度から実施される文部科学省奨学金（特別枠）修士課程にベトナムから3人の応募があった。また、ベトナムには先方の協力機関からの要請にもとづき本学大学院生を2020年11月よりJICA海外協力隊員として派遣することが決定した。

●外部資金獲得の成果

令和元年度 科学研究費「国際共同研究（B）」に採択された。

令和元年度 JICA 草の根技術協力事業（3か年最終年度）を獲得した。

●次年度以降の取組予定

佐賀地域の低平地の特徴と本学の農学研究成果の蓄積を生かし、佐賀大学プロジェクト研究所に新規の研究プロジェクト「農業生産環境の修復と持続的な食農ビジネスの推進に関する調査研究」を申請した。同プロジェクトではベトナムだけでなく、インドネシアやスリランカを対象を拡大して国際共同研究を組織し、本学のSDGsへの貢献拡大をめざす。また、対象国からの学生受入と本学学生との交流推進拠化の整備を推進する。

【農学部】

「世界的な視野を涵養する農学国際教育の推進」

●事業概要

佐賀大学は在学期間中の留学について積極的な支援体制が整備されており、そのことが本学を志望するきっかけとなっている。農学部に入学者の多くの学生も相当数が在学中に留学を希望し、これまでもアジア・オセアニア地域に多くの学生を長期交換留学生として送り出してきたが、カリキュラムの問題から留年を余儀なくされる事象が多く、学生に時間的、および経済的負担を強めているのが実情である。

昨年度、本事業の主担当・辻田と農学部国際交流推進委員長・鄭教授でペラデニア大学農学部・大学院農学研究科に出向き、佐賀大学への紹介、留学希望学生との面談を実施した。その際、ペラデニア大学で開講される授業科目が本学で開講される授業を内包する形であり、かつすべて英語による授業であることも確認した。

そこで、本年度は、農学部にて在学中のSPACE生を通じた共同研究（Suranga 准教授、スリランカ薬用植物を活用した嚢胞性線維症の緩和）を促進するために、辻田がペラデニア大学に出向き、現地での動物実験サンプルの取得等、研究活動を実施する。更に、本年度はペラデニア大学の教員を本学に招き、農学部教務関係教員との意見交換を通して、相互交流プログラム樹立に向けたキックオフを図りたい。すでに、農学部では平成29年度に専門科目（必修）の読み替えに加えて、必修科目（選択）および専門科目（選択）も可能（平成30年3月6日農学部教授会）としているので、実現可能性は高いと言える。

同時に、本事業の主担当はマレーシア・プトラ大学農学部出身の博士課程学生を指導する過程で、プトラ大学農学部長 Nazamit 氏と研究内容についてメールにて意見交換する機会があり、本年度はスリランカに加えての選択肢として連携強化を図ることとしている。プトラ大学は農業大学を前身とする総合大学で、クアラルンプール郊外に広大な圃場を有し、農学部を主体とした連携強化のため、開講授業内容期や研究設備待、共同研究の機会について確認を行うとともに、本学への留学機会等の説明を行う。本訪問は、辻田がスリランカに渡航した際に立ち寄り実施するものとする。

●相手国・相手機関

スリランカ・ペラデニア大学農学部、大学院農学研究科、理学部

マレーシア・プトラ大学、農学部

●支援額 350千円

●国際共同研究の成果

農学部では直近3年間にのべ14件、海外における研究活動を実施しており、第3期中期計画にある研究者交流の30%増加とすると、4-5件の増加を目指している。昨年度、本事業を含む形でJASSO海外留学支援制度に応募して獲得し、本年度も採択された。本事業の中に、本学の大学院生をスリランカへ派遣して研究活動を活性化することができたことと、ペラデニア大学の Suranga 准教授を佐賀大学へ招へいし、次の人材交流を進める基礎を作ることができた。

●外部資金獲得の成果

大学院生を対象とした JASSO 海外留学支援制度（協定派遣）を継続取得した。今年はさくらサイエンスプログラムに応募することを考えている。国費留学生の優先配置を行う特別プログラムには採択されたので、優秀な学生を選抜できればと考えている。

主担当教員においては、ペラデニア大学を含めた形で、国際共同研究加速基金（A）へ応募し、研究経費の自助努力に努める。

●次年度以降の取組予定

スリランカペラデニア大学とは研究活動を通して、密接な連携大学としてこれからも昵つきを強めたい。次年度は、さくらサイエンス等でのさらなる佐賀大学のプレゼンス向上と、現地の学生の選抜を行いたい。加えて、スリジャワルダナプラ大学とも協定締結へ準備ができればと考えている。マレーシアにおいては、まずは協定の見直しと、全学的な協定へ向けた、書類作成等を進めることとする。

【肥前セラミック研究センター】

「やきもの素材及びプロダクトデザイン研究プログラム」

●事業概要

①“CLASS-Clay and Glass International Symposium 2019”：チュラロンコン大学において、やきものとガラスのシンポジウム研究発表、パネリスト及び、ワークショップを行い、本センターの研究の周知とアジア圏の陶芸とガラスの研究の動向を共有し、研究の発展性を探る。

② KICET (Korean Institute of Ceramic Engineering and Technology) とやきもの素材 (磁器素地、釉薬など) に関する共同研究を行う。

② KICET と景德鎮大学が共催する国際シンポジウムに参加し、研究者が交流する。

③ EKWC (European Ceramic Work Center / @Sundaymorning) と将来の陶磁器デザイン交流、EKWC が持つコネクションのアーティストやデザイナーとの交流についての会談を行う。

③ Space&Matter との陶磁器製品の共同デザイン開発を行う。商品化、肥前地区の窯元での生産に向けた具体的なプラン策定。

●相手国・相手機関

タイ・王立チュラロンコン大学 応用美術学部 陶芸学科

中国・KICET (Korean Institute of Ceramic Engineering and Technology)・韓国景德鎮大学

オランダ・EKWC (European Ceramic Work Center / @Sundaymorning)・オランダ Space&Matter

●支援額 279,615円

●国際共同研究の成果

①オランダ、ドイツ、及びアジア圏の窯業関連の大学、研究機関と連携協力し研究を進めている。11月26日～12月3日までタイ・チュラロンコン大学にて焼き物とガラスについての国際シンポジウムが開催され有田の焼き物についての講演を行った。

② KICET とは学術協定を既に締結している。

③現在進めているプロジェクトについて、デジタルデザイン設計の可能性を検証している。また有田の協力窯元との間においても生産に向けた陶土試験を行っている。

有田焼をはじめとする肥前陶磁器は佐賀県を代表する伝統工芸であると世界的にも認知されている。その陶磁器研究を精力的に行うことは、他の大学ではできない佐賀大学の強みの一つである。やきもの素材に関する研究は、九州地区に限らず、全国的に見ても実施している大学・研究機関は数少ない。肥前セラミック研究センターは日本のやきもの研究プラットフォームを形成し、その核となることを目指している。日本のやきもの研究プラッ

トホームにおける研究を海外に展開していく上で、世界的に有名な KICET との研究者交流は必要不可欠である。また、プロダクトデザインについて佐賀県が交流中のオランダ関係機関との交流は重要視する必要がある、特に EKWC については将来の交流強化を目指している。これらの活動を通して、セラミック分野での欧州及び、アジア圏でのネットワークを構築する。

●外部資金獲得の成果

科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究代表者：赤津 隆 「天草陶石を原料とするアルミナ強化磁器の強化メカニズムの解明と高強度化設計」 455万円 (平成30年度～令和2年度まで3年間の総額、間接経費105万円を含む)。

●次年度以降の取組予定

- ①欧州やアジア圏の連携協定校と教員や学生間の交流を継続的に進め、やきもの研究のプラットフォームを形成する。
- ② KICET と景德鎮大学との連携を継続し、やきもの研究の国際ネットワークに積極的に参画する。
- ③来年度も引き続き、海外交流実習で学生を派遣、Creative Residency in Arita 事業における佐賀大学でのアーティストやデザイナーのレクチャーやワークショップを開催する。
- ④引続き Space&Matter との打ち合わせを行いながら有田の協力窯元との商品化について具体的に進めていく。

【理工学部】

「インドネシア国際協働教育研究コンソーシアム」

●事業概要

1) ハサヌディン大学・国際コース生の2ヶ月間のインターンシップ生としての受入に関する最終調整。(派遣2名：日野・押川英夫准教授(都市))；2) 佐賀県内企業の開発技術に基づく深層混合処理工法のインドネシアへの実装に関する共同研究の推進に関する打合せ(派遣2名：日野・押川)；3) スラウェシ島地震に伴う同低平地の中・長期的問題の予測、解決策及び復興策に関する共同研究の推進に関する打合せ(派遣2名：日野・押川)。

●相手国・相手機関 インドネシア・ハサヌディン大学、サムラトランギ大学、タデュラコ大学

●支援額 350千円

●国際共同研究の成果

JASSO 海外留学支援制度(協定受入)・理工学部国際パートナーシップ教育研究プログラムに採択され、「ASIAN を対象とした低平地国際協働教育プログラム」を継続的に開催し、ハサヌディン大学との間の実質的連携を継続させた。

ハサヌディン大学国際コース生のインターンシップ生としての受入については既に安定の段階。JASSO 海外留学支援制度(協定受入)・理工学部国際パートナーシップ教育研究プログラムに採択され、ハサヌディン大学の教員・学生を受け入れるとともに、同プログラムに参加した当学の邦人学生における海外留学の興味を増加させた。

●外部資金獲得の成果

1) JASSO・海外留学支援制度(協定受入)(採択)；2) 科研費・海外研究強化(B)(不採択)；2) 科研費・2020年度基盤研究(B)(申請中)；3) JST-SDGs 支援事業(Bタイプ)(申請中：代表・中西要祐(早稲田大学))。

●次年度以降の取組予定

- 1) 理工学部都市工学部門におけるハサヌディン大学・国際コース生の2ヶ月間のインターンシップ生として

の受入

- 2) 佐賀県内企業の開発技術に基づく深層混合処理工法のインドネシアへの実装に関する共同研究の推進
- 3) インドネシア・タデュラコ大学との間の部局間交流協定の締結およびスラウェシ島地震に伴う同低平地の中・長期的問題の予測、解決策および復興策に関する共同研究の推進
- 4) 学部資金獲得に向けた継続かつ必死の努力と取組。

【理工学部】

「カリマンタン工科大学との学部間協定締結ならびにスラバヤ工科大学との再生可能エネルギー分野の国際共同研究の推進」

●事業概要

1. カリマンタン工科大学 (ITK) の訪問ならびに学部間協定の締結式

学部間協定の覚書 (MOU) について調整を進めている。現在、大学院を備えてない ITK から本学大学院理工学研究科博士前・後期課程への進学が期待できる。また、教員間の共同研究が期待できる。(派遣 2 名: 渡学部長 (学部長交代のため豊田学部長に変更)・富永)

2. 理工学部「再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム」の国際展開

上記の「電気化学分科会」(会長: 富永) の国際展開として、スラバヤ工科大学 (ITS) と ITK において、燃料電池に関する協議を行う。

3. ITS との大学間協定締結における今後の具体的な取組みの協議

MOU に基づいた相互交流の強化のための具体的な今後の取組について、ITS 国際担当理事 (ITS 副学長) との意見交換。

4. JST さくらサイエンスプランと CommTECH を介した双方向の学生交流

東ジャワ域における機軸大学の ITS ならびに ITK との交流によって:

- 1) 大学院博士前・後期課程の恒常的確保の期待
- 2) 双方向の学生間交流の継続的発展
- 3) 次世代を担う若手教員の交流
- 4) 国際共同研究の推進
- 5) 競争的資金の共同申請 (例えば、JST 戦略的国際共同研究プログラム)
- 6) 共創プラットフォームの国際展開による県内企業の国際化の促進

など、Win-Win の交流が期待できる。

●相手国・相手機関 インドネシア・カリマンタン工科大学 (ITK)、スラバヤ工科大学 (ITS)

●支援額 302,080円

●国際共同研究の成果

- ・ CIREn (再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム事業) に電気化学分科会を設立した。
- ・ 第 3 期中期目標・中期計画において、「アジアを中心に広く海外の研究機関との連携を強化し、地域活性化の核となる国際性豊かな研究拠点としての水準を高める」

本ビジョンに沿って、国際共著論文を発表した。(① Maisari Utamia and Masato Tominaga 他、RSC Advances (RSC Journal), 9, 41392~41401, 2019、② Ardi Rofiansyah, Masato Tominaga, Fredy Kurniawan, Materials Science and Engineering (IOP Publishing), 494(1), article No.012049, pp.1~7, 2019)

- ・ 「研究者交流を第 2 期中期目標期間の平均より 30% 増」

インドネシア・スリビジャヤ大学より 2 名の教員を、インドネシア・スラバヤ工科大学より 3 名の学生を、カリマンタン工科大学より 1 名教員と 1 名学生、タイ・チュラロンコン大学より 1 名の大学院生を、JST さくらサ

イエンズプランにより理工学部に短期招聘し研究の交流を実施した。

【受入促進の取組状況】

インドネシア政府・サンドイッチプログラム

インドネシア政府奨学金によるサンドイッチプログラムとして、スラバヤ工科大学の博士後期課程の学生2名の受入を予定。令和2年10月から3～4か月間の予定。具体的な受入のための書類の準備が進行中である。

JST さくらサイエンス

インドネシア・スリビジャヤ大学より2名の教員を、インドネシア・スラバヤ工科大学より3名の学生を、カリマンタン工科大学より1名教員と1名学生、タイ・チュラロンコン大学より1名の大学院生を理工学部に短期招へいした。

また本事業を通して、本学を深く知って貰うことで大学院博士前期・後期課程の学生の確保に繋げる。(実績：平成30年10月にITKより博士前期課程の学生が入学、令和2年10月入学のEPGAに招へい学生が申請中)

【派遣促進の取組状況】

スラバヤ工科大学主催のCommTech Camp 2019 (Community and Technological Camp Insight 2019) に本学学生を派遣予定であったが、開催時期が2月初旬のため期末試験期間と重複して派遣することが出来なかった。(実績：平成29、30年度に農学研究科と工学研究科の大学院生がそれぞれ1名ずつ参加した)

●外部資金獲得の成果

1. 平成31年度は、JST さくらサイエンス事業を2回採択された。
 - (1期目：1,288,936円の予算をJSTより獲得)
 - (2期目：1,264,736円の予算をJSTより獲得)
2. JSPS 二国間共同研究事業に申請 (残念ながら不採択)
3. CIREn の電気化学分科会を設立して2019年度の研究費を佐賀県より獲得した。現在、県内企業との再生可能エネルギー分野での共同研究を画策中である。

●次年度以降の取組予定

【次年度以降の事業内容】

1. CIREn 電気化学分科会での共同研究の推進とカウンターパート大学との国際連携の実現
2. JST さくらサイエンスプランと CommTECH を介した双方向の学生交流の継続
3. 競争的資金の共同申請

【最終目標】

重点大学のITS主軸にしたインドネシア東部域における、物質循環と再生可能エネルギーの国際研究拠点形成と国際共同研究の競争的資金の確保

～～追加募集分～～

【農学部】

マレーシア工科大学との連携強化事業

●事業概要

当センターは、共同利用・共同研究拠点として、国内の研究者コミュニティーへの施設の提供および共同研究の推進を進めている。一方、近年は、国際的な共同利用・共同研究拠点の役割を担うべく、「知の世界展開」として国際的な貢献を推進しています。特に、ASEAN 諸国との連携強化を図っている。なかでもマレーシア工科大学 OTEC センターとは、2013年に学術協力協定を結び、JST/JICA の SATREPS 事業の共同実施を2019年度より行っている。本事業は、これらをさらに発展させ、マレーシア工科大学全体と佐賀大学との連携強化を目指す。

●相手国・相手機関 マレーシア工科大学（UTM：University of Technology Malaysia）

●支援額 201,017円

●国際共同研究の成果

共同利用・共同研究拠点として、国際的な共同利用・共同研究の推進 および、国際的な人材育成の拠点化を目指しているが、今回の事業の成果として、UTM との学生等の人材交流の進め方について、UTM の国際課と情報交換ができ、成果が得られた。

●外部資金獲得の成果

今年度は既に、JST さくらサイエンスの予算を獲得。来年度以降、他の外部資金獲得に繋げたい。特に、来年度以降の文科省が目指す国際的な人材育成の関連事業への申請を検討している。

●次年度以降の取組予定

今後、今回の事業で情報交換を行った UTM の国際課と連携して、MJIT 等との学術交流協定等の締結に向けて、準備を進め、一層の強化を図る。

【農学部】

「英語による農学教育の実現と推進」

●事業概要

佐賀大学では在学期間中での留学を実現させるため、経済的支援策を充実させ、昨今、受験生にも広く浸透し、本学を志望するきっかけとなってきた。農学部にも所属する相当数の学生も、在学中に留学を希望し、これまでアジア・オセアニア地域に長期交換留学生として送り出してきたが、カリキュラムの問題から留年を余儀なくされる事象が多く、時間および経済的負担を強いているのが実情である。

これまで、本事業の主担当・辻田（農学部国際交流推進委員）は、英語で授業が開講されているアジア圏の大学に注目して、対象大学の選定を進めてきた。その理由として、

- ・欧米の大学は非常に高い英語運用能力を要求するので派遣できる学生が限られる
- ・欧米は滞在生活費が高く、JASSO の奨学金では賄えない
- ・東南アジアをインフラ輸出対象と考える本邦企業が多く、人材の要望も多い

などが挙げられる。

本事業主担当はマレーシア・プトラ大学農学部出身の博士課程学生を指導する過程で、プトラ大学農学部長 Nazamit 氏と研究内容についてメールによる意見交換を定期的に行っている。本申請事業では、本事業主担当との昨年度から実施している、「マレーシア産キノコの機能性評価と成分探索」についての分担研究打ち合わせに加え、本学部の学生や大学院生を対象とする開講授業内容や、卒業論文・修士・博士論文研究に必要な設備を実地で確認して、学生を滞在させることが可能かについて検証することを主たる目的としている。同時に、現在は農学部とのみ締結されている協定を、全学的な協定締結に昇華するための事前打ち合わせも兼ねる。

●相手国・相手機関 マレーシア・プトラ大学 農学部

●支援額 166,580円

●国際共同研究の成果

農学部では直近3年間にのべ14件、海外における研究活動を実施しており、第3期中期計画にある研究者交流の30%増加とすると、4-5名の増加を目指している。昨年度、本事業を含む形で JASSO 海外留学支援に応募して獲得し、本年度も採択された。マレーシアにおいては今回の事業実施中に、トゥンフセインオン大学において短期留学プログラムが企画されることになり、数多くの農学部の学生が参加することにつながった。今後は、主に訪問した UPM との相互交流事業の実施に向け、SPACE 農学部版 Mobility プログラムの立ち上げ等を企画

する。

●外部資金獲得の成果

大学院生を対象とした JASSO 海外留学支援の継続取得、JASSO 海外留学支援（協定受入）にチャレンジする。主担当教員においては、国際共同研究加速基金（A）などへ応募し、研究経費の自助努力に努める。

●次年度以降の取組予定

マレーシア・プトラ大学とは、部局間協定から、大学間協定へ繋げるために、研究活動の全般的な説明を受ける予定としている。特に生命科学系や環境工学系に重点を置いて、次回は意見交換を進め、大学間協定を仲介することを目的とする。

【農学部】

「ブルゴーニュ大学（フランス）との連携強化」

●事業概要

フランス・ブルゴーニュ大学の大学院施設（ESIREM）を教員と大学院学生とで訪問し、研究者・学生間の交流を行う。お互いの研究紹介、共同研究打合せ、佐賀大学理工のプロモーション、研究室訪問、施設見学、懇親会などを実施する予定である。現在までに2年連続して、インターンシップの留学生を受入れ、昨年は本学からも2名の学生を訪問させたが、この関係を絶やすことなく、早期の国際共同研究の予算獲得に結びつけたいと考えている。また、現在受入れ中の学生は博士後期への進学を検討していることから、細かくケアしたいと考えている。

●相手国・相手機関 フランス・ブルゴーニュ大学

●支援額 350千円

●国際共同研究の成果

部局では、留学生の受入れ、本学学生の海外派遣に重点をおいており、本連携はその方針に沿うものである。これまでに、4名の留学生受入れ、3名の本学学生の派遣を行っている。次年度も複数（博士後期を含む）を受入れる予定である。

●外部資金獲得の成果

今年度、JSPS 国際共同研究強化Bへの2件の申請を行ったが、残念ながら不採択となった。新たに、JST 日独仏 AI 研究事業、および SAKURA2019への申請を実施している。これが獲得できれば、共同研究の促進、相互の留学生派遣を拡充できると考えている。

●次年度以降の取組予定

外部資金獲得が未だ達成できず誠に残念であるが、連携は幸いにも強まっており、次年度は、今年度受入れたインターンシップ学生が、博士後期課程への入学を希望している。また、先方からのインターンシップ派遣学生を2名に拡充して頂くことになっている。この博士後期の研究を軸に共同研究を推進したい。また、博士に絡めた Joint Degree プログラムの立上げについても検討できれば、さらに本連携を軌道に乗せられると考えている。本学からも他の若手教員の参加を募りたい。

【理工学部】

「中国・北京工業大学との建築・土木工学分野における共同研究の推進」

●事業概要

昨年度まで副担当だった末次准教授が宮崎大学へ転出したため、本交流の土木分野の担当がいなくなった。現在暫定的に、李准教授（都市エネルギーマネジメント分野）に対応してもらっているが、新たに土木分野の教員に加わってもらい、北京工業大学との研究交流を促進してもらおう。そのためにも、再度北京工業大学を訪問し、

新たな共同研究の機会を作ることを計画している。

●相手国・相手機関 中国・北京工業大学

●支援額 345千円

●国際共同研究の成果

国際交流のビジョンにある「実績に基づいた重点交流」を念頭に、中国の北京工業大学を研究者交流先に選定し、昨年度から継続して共同研究を進めた結果、2022年冬季オリンピック（北京）屋外競技場観客用の採暖装置の考案に至った。今回の交流で屋外競技場の視察と関係者との技術的なディスカッションは行えたが、会場が未完成のため、実測評価実来年度に持ち越すことになった。

一方、今回の研究交流でビッグデータの活用に関する共同研究を実施出来る可能性が見いだせた。2019年9月に北京市内に開港した新空港「北京大興国際空港」の20万点を超える各種データ収集を北京工業大学が担うことになっている。そのデータの中からエネルギーと環境に関してこれまでの研究の知見も活用してAIによるエネルギーシステムの最適化を試みられる可能性が見いだされた。

●外部資金獲得の成果

令和2年度 国際共同研究強化基金（B）申請 小島教授

令和2年度 国際共同研究強化基金（B）申請 李准教授

●次年度以降の取組予定

共同研究の成果である屋外競技場における採暖装置の性能を実測により評価し、運用方法の検討を行う予定である。

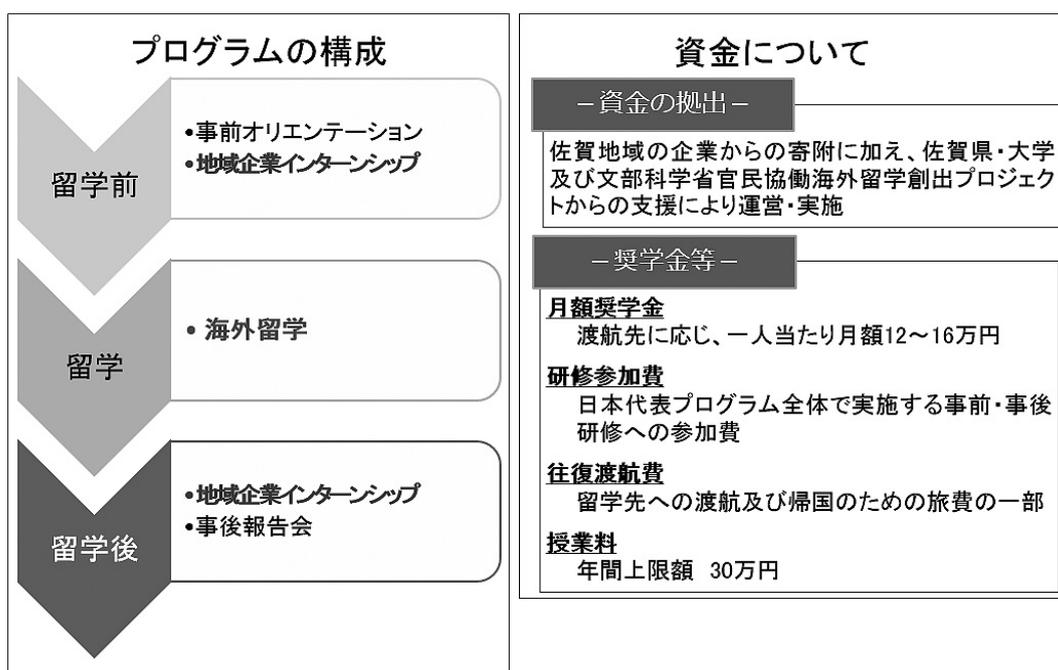
また、新たな研究テーマとして北京大興国際空港の各種ビッグデータを利用した研究を開始するに当たり、まずはエネルギーと環境に関するデータを活用したエネルギーシステムの最適化を目指した共同研究を行う。ビッグデータに対して従来型の分析を試みる一方で、AIを利用した分析も試みる予定であり、それに必要な研究メンバーを追加する予定である。

更に、土木分野の共同研究を新規に計画するために、水理学や河川工学の研究者の紹介を先方に依頼している。

IV. 地域国際連携

1. 世界とともに発展する SAGAN グローバル人材育成事業

本事業は、「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」の実施母体である「さが地方創生人材育成・活用推進協議会」（会長：宮崎耕治 佐賀大学学長）が平成28年度より実施している、海外留学と県内企業でのインターンシップを組み合わせた海外留学支援事業である。



プログラムの構成及び資金について

4年度目となる今年度は本学学生から9件の応募があり、書面審査に続き、支援企業等による面接審査の結果5名が採用された。

平成31年度の本学の採用留学生（計5件）

留学期間	学部・研究科	学年	派遣先国	事前事後 インターンシップ先	留学計画のタイトル
2020. 1～ 2020. 5	教育学部	4	フィンランド	(株)オプティム	ICTで佐賀から教育を変える！！
2019. 11～ 2020. 4	教育学部	4	フィンランド	佐賀市エコプラザ	環境教育を通じて、自然と子どもを結び、環境に優しい社会を！！
2020. 2～ 2020. 6	芸術地域 デザイン学部	3	オランダ	シムアット デザインラボ	人とモノをつなぐ。伝えるチカラで、佐賀のモノ・コトをより魅力的に発信！
2019. 9～ 2020. 2	工学系研究科	2	ベルギー	(株)戸上電機製作所	光学先端技術であるラマン光学活性分光についてアントワープ大学との共同研究の先駆け
2019. 9～ 2020. 1	理工学研究科	1	イギリス フランス	(株)香蘭社	佐賀県の陶磁器産業の活性化を目指して

1.1 事前オリエンテーション

【日 時】 第1部 令和元年7月13日（土）10時00分から12時00分

第2部 令和元年7月16日（火）14時00分から17時30分

【場 所】 第1部 佐賀大学 本庄キャンパス 理工学部6号館2階多目的セミナー室

第2部 〃 教務課会議室

【参加者】 地域人材コース第11期生

【内 容】 第一部 危機管理オリエンテーション

第二部 佐賀県産業の現状・課題について （佐賀県産業企画課）

佐賀県政の概要と国際戦略について （佐賀県国際課）

企業インターンシップ事前研修 （戸田順一郎佐賀大学経済学部准教授）

2019年度（第11期）派遣留学生として、佐賀大学生5名、筑紫女学園大学生1名が参加した。学生たちは今回の事前オリエンテーションに参加したことにより、多くの情報・知識を得たと同時に、仲間との交流を深める一日となった。



事前オリエンテーションの様子

1.2 派遣留学生壮行会

【日 時】 令和元年8月20日（火）15時00分から17時00分

【場 所】 佐賀大学 理工学部6号館2階多目的セミナー室

【内 容】 派遣留学生6名が留学計画の説明を交えながら決意表明を行った。昨年留学した先輩学生の激励をこめた留学報告に耳を傾け、海外留学及び国内でのインターンシップに向けて決意を新たにした。交流会では出席者と派遣学生との意見交換が行われ、派遣留学生は多くの支援企業と交流した。



全体集合写真



意見交換会

2. 佐賀県立武雄高校との交流

●佐賀県立武雄高校との交流

平成27年度より、佐賀大学留学生と佐賀県立武雄高校の交流を開始した。令和元年度は、香港中文大学サマープログラムで佐賀に短期留学した香港中文大学生がプログラムの一環で武雄高校を訪問し、交流活動を行った。留学生にとっては、日本の高校生の学校生活や部活動、興味、趣味のことなどを、直接聞き、体験できる貴重な機会となった。武雄高校の学生にとっては、学習した英語を生で使える機会であり、また普段接することのない香港の学生の様子を直接聞ける機会となった。双方にとって、有意義な交流であった。

実施日時：令和元年7月3日 13:00から18:00

参加学生数：佐賀大学留学生10名、武雄高校生のべ100名程度

実施内容：①武雄高校2年6組の学生との交流

香港紹介、武雄・佐賀紹介（グループ交流）

②武雄高校2年4組の学生との交流

香港紹介、日本の遊びの紹介（グループ交流）

③武雄高校の学生の案内による構内見学

④武雄高校有志学生との交流

香港に伝わる昔の遊び体験

⑤武雄高校の学生の案内による部活動見学・体験

使用言語：英語中心



武雄高校生との交流

3. 佐賀地域留学生等交流推進協議会の取組

「佐賀地域留学生等交流推進協議会」（以下、推進協議会）は、佐賀地域に在住の、留学生と地域住民との交流により、相互の文化理解と友好親睦を深めることを目的に、平成元年に設立され、2019年度現在、県内50団体（教育機関、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体等）で構成されている。

年1回、実務者レベルで組織される「運営委員会」と、構成員全員で組織される「総会」が開催され、推進協の活動等について協議が行われてきた。

2019年度は、昨年度に引き続き、「地域活性化を見据えた留学生と地域との交流促進のための取組み」として、メーリングリストを活用した地域の伝統行事・イベントの情報集約と、参加した留学生の体験談のフィードバックと主催団体の事例報告を行った。この事例では、メーリングリストを活用しつつ、主催団体から国際交流推進センターへ留学生の参加者募集案内があり、国際交流推進センターで参加希望者を取りまとめ主催団体へ連絡した後、双方で当日の詳細等についてやり取りが行われた。行事後は、参加してよかった点、改善してほしい点等の留学生の体験談が主催団体にフィードバックされ、主催団体からは、留学生の意見を今後の事業に役立てたい等の事例報告があり、主催団体の行事改善にプラスとなった。さらに今年度は、この仕組みを活用した団体や行事に参加した留学生に「総会」の場で発表の場を設けた。発表の場を設けることで、この仕組みのさらなる拡大を図り、留学生と地域住民の交流促進につなげることができた。

～以下、事例報告～

項目	記入欄
行事名	第35回鹿島ガタリンピック
開催日時	令和元年6月2日 11:00～15:00
場所	道の駅かしま
行事の内容	鹿島ガタリンピックへの参加と肥前浜宿での宿泊体験
参加者数	総数1,500名（うち留学生11名） <留学生内訳> 佐賀大学11名
以下、留学生からの体験談を基に記入願います。	
参加してよかったと思う点 (留学生からの主な意見)	<ul style="list-style-type: none"> 初めての体験で楽しかった。 自然に触れ合うことが出来た。 スタッフの方が親切だった 宿泊先は快適だった
改善してほしい点 (留学生からの主な意見)	<ul style="list-style-type: none"> 宿泊先に険しい道があった。 暑い時間帯にまちなみの見学したのが疲れた ゲストハウスではなくホームステイ（民家泊）で地元の人ともっと触れ合いたかった。
その他 (留学生からの主な意見)	<ul style="list-style-type: none"> スタッフの皆さんに感謝したい
意見を受けての 次回以降の取組み	<p>今回、当実行委員会のスタッフの減少、予算の縮小を受け、また組織体が変わり、留学生の皆さんの受入れ方法に大幅な変更を行わせていただきました。特にゲストハウスへの受入れは肥前浜宿の伝統的町並みを活用した宿泊施設で、古民家を改装したものでしたが、ホームステイのような個々人の対応が不足し、日本文化と触れ合うという部分では物足りなさを感じてしまったようでした。ただ、ガタリンピックへの参加に関しては皆さん満足していただけたと思います。</p> <p>また参加人数が例年より少なかったため、当初の予定の懇親会を他の日本人学生と合同交流会に変更したのも、言葉の壁が厚く交流に至らなかった点のように感じました。</p> <p>今回は、ラマダンや土曜日の課外事業との重なりを考慮しても、参加希望人数が少なかったのは、次回以降の大きな課題です。当会でも試行錯誤の中での受け入れ方法でしたので、事前に窓口の国際課の方ともっと相談し、参加費や宿泊方法の見直し、もしくは日帰り参加も含めて検討していきたいです。</p>

項目	記入欄
行事名	国際溪流滝登り in ななやま
開催日時	令和元年7月28日(日) 10:00~16:00
場所	唐津市七山滝川 鳴神の丘運動公園~滝川川
行事の内容	七山の自然の中で豪快なアドベンチャースポーツ感覚で、助け合いながら、滝を登り淵を泳ぎ自然を体感し、環境保全の意識の高揚と、併せて外国人を招き国際交流の場とし、地域の活性化を図ろうとするものである。
参加者数	総数1,300名 内外国人135名 総参加国 36カ国(日本含む) 留学生名 61名(佐賀大学21名、九大40名) <その他外国参加者> ALT 6名、国際交流協会9名、米軍佐世保基地36名 その他23名
以下、留学生からの体験談を基に記入願います。	
参加してよかったと思う点 (留学生からの主な意見)	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生や地域の人との交流や、皆の助け合い、飲食物の提供があり美味しかった。日本の良い思い出となった。 ・安全面の配慮が行き届いていた。水かきれいかった。 ・留学生が日本人と交わる良い機会で、チームワークを学ぶ、きっかけとなった。
改善してほしい点 (留学生からの主な意見)	<ul style="list-style-type: none"> ・日陰の休憩所が欲しかった。 ・開会式が長かった。 ・急流で長いロープがあったら良い。 ・給水ポイントを増やして欲しい。
その他 (留学生からの主な意見)	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人の参加が多く疎外感がなかった。 ・イベントの構成が素晴らしい。 ・親切な対応と安全面への配慮ありがとうございます。
意見を受けての 次回以降の取組み	<p>毎年貴大学からの参加に感謝しております。 本大会は「国際」と冠を付けており、外国人と触れ合う機会が少ない山村で、自然の中での国際交流を目的としており、外国人との触れ合いが魅力で、若者たちがイベントを支え今年で30回を迎えました。 留学生から日本の良い思い出になったとあり、主催者として嬉しい限りです。 本大会はメイン会場及び川と広範囲なコースであり、スタッフ350名で、「安全で楽しく」をモットーに実施しています。</p> <p>川の中でお互いに助け合い登る姿は、ここには国境はありません。他では体験できない経験と思います。 頂いた意見について述べさせていただきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日影が無かった 人数的に無理の点もありますが、来年は寒冷紗(日除け)等で少しでも多く日陰を作りたいと思います。 ・開会式が長かった 以前より挨拶等少なくし、挨拶者も心得て30分程度で終わりました。炎天下で大変と思いますが、セレモニーですのでご理解いただきたいと思います。 ・急流でロープを 急流には補助員とロープ、浮輪等用意していますが不足分については補充します。 ・給水ポイント 熱中症対策として本部に1か所コースに2か所設けていましたが、コースに1か所増やす検討をします。 <p>色々な貴重なご意見ありがとうございました。 今後更に「安全で楽しい大会」へと努力していきます。 貴大学からは二十数年参加していただいています。今後ともよろしく願います。</p>

項目	記入欄
行事名	地引網例会
開催日時	令和元年7月13日(土) 10:45~15:00
場所	旅館「魚半」(浜玉町 虹の松原)
行事の内容	佐賀大学の私費留学生を招き、地引網、懇親会、海岸清掃奉仕などを通して、国際親善に寄与するもの。
参加者数	総数名 52名 (うち留学生16名) <留学生内訳> 佐賀大学 16名

以下、留学生からの体験談を基に記入願います。

<p>参加してよかったと思う点 (留学生からの主な意見)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地引網、日本食等の日本文化を知るきっかけになった。 ・浜辺で地引網ができて楽しかった。 ・普段大学では年少者とばかり話をするため、年上の人と会話するよいきっかけとなった。 ・タコを初めて見た。 ・地引網の最中、皆が助け合っていた。
<p>改善してほしい点 (留学生からの主な意見)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地引網の技術をもっと知りたかった。 ・魚をどう料理するかデモンストレーションしてほしかった。 ・食物アレルギーがないか聞いてほしい。
<p>その他 (留学生からの主な意見)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・悪天候だったが楽しめた。地引網以外にも何か活動があればなおよかった。
<p>意見を受けての 次回以降の取組み</p>	<p>佐賀大学との事前やり取り等はスムーズにでき、地引網例会は特に事故もなく無事に執り行われた。終了後、留学生からは、地引網例会を通して、日本文化を知ることができた、などの前向きな感想がある一方で、地引網の技術をもっと知りたい、食物アレルギーを事前に聞いてほしい、地引網以外の活動も取り入れてほしい、といった要望もあった。</p> <p>すべての意向を反映させることは難しいかもわからないが、今後の行事实施の課題としたい。</p> <p>この地引網例会は、佐賀西ライオンズクラブ結成3年目からの継続事業である。今後も、留学生をはじめとした参加者の意見をいただきながら、地引網例会を盛り上げていき、留学生と地域のさらなる交流活性化につなげたい。</p>

V. その他住環境整備等

1. 佐賀大学国際交流会館

佐賀大学では国際交流の促進に寄与するため、外国人留学生及び外国人研究者の居住施設として「佐賀大学国際交流会館」（以下、会館）を有している。

会館は単身者用宿舎としてのA棟、夫婦・家族用宿舎としてのB棟、家族者用宿舎としてのC棟がある。A B棟の竣工はそれぞれ平成2年である。C棟については、職員宿舎のひとつであった職員西宿舎（昭和45年竣工）を転用し平成28年10月から留学生用宿舎として運用している。

各棟の居室数はA棟42室、B棟11室、C棟20室となっている。A棟には共用施設として1階にラウンジ、図書・研修室、2階に会議・研修室、和室、3階に談話室を設けていて居住者同士や留学生と日本人学生との交流、学内外の交流団体等との交流の場として提供している。

A B棟の各居室には生活上の設備として各居室にユニットバス、トイレを設置し、ベッド、ロッカー、エアコン、冷蔵庫、ガスコンロ等の様々な備品類を備え、居住者が快適に生活できるよう支援している。また、インターネット接続サービスを学外業者と提携して使用できるようにしている。

管理面では、会館に館長及び主事を置き、前者は国際交流推進センター長が、後者は国際課長が務め、会館の管理運営に当たっている。

会館には、一部居室を日本人学生（大学院生又は3、4年次学部学生）4人に提供し混住させている。彼らは留学生のチューターとして生活上の相談相手やルールの助言を担っている。

会館入居者の防災意識を高めるため、年1回消防訓練を地元消防署の指導の下に実施している。この防災訓練では実際に火災が発生したことを想定し入居者全員による避難訓練を行うほか、実際に消火器を使った消火訓練も体験させ、非常事態発生時に即時対応できる心構えを体得させている。

平成28年の旧職員西宿舎の留学生宿舎転用により、留学生の住環境は格段に向上したものの、一方で竣工から45年以上を経過し、経年劣化による管理維持が深刻な問題となっている。毎年、漏水等の小規模な緊急修繕を重ねているが、留学生が安心快適に居住することで学業に専念できるよう、大学として計画的な修理・修繕計画が求められるところである。

2. その他の住環境支援

上記会館の入居者以外の留学生は、大学周辺の民間アパート等に入居することとなる。

このうち、交換留学生及び日本語・日本文化研修留学生に対しては、アパート等9物件の情報を提供し、住環境を支援している。

また、その他の支援として、留学生が貸主とアパート賃貸借契約を締結する際、連帯保証人が見つからない場合には、（公財）日本国際教育支援協会が実施している「留学生住宅総合補償」（以下、保険）への加入を条件に、国際交流センター長名で連帯保証人となる機関補償制度を平成12年から実施している。

なお、留学生が本学を途中離籍した場合、保険は補償外となる一方で、貸主と締結した契約書は離籍後も連帯保証は継続するため、離籍した留学生の家賃滞納や原状回復の責が本学に及ぶことから、センター長名の連帯保証期間を留学生の在籍時のみとする保証書を定め平成29年度より実施している。

・国際交流会館の入居率

	区分	居室数	寄宿料 (共益費含む) (円)	平成29年度 入居率(%)	平成30年度 入居率(%)	令和元年度 入居率(%)
留学生用	単身	40	8,200	100.0	97.5	95.6
	夫婦	3	12,300	0.0	66.7	41.7
	家族	4	15,000	79.2	100.0	72.9
	家族 (旧:西宿舎)	20	13,400	97.5	100.0	99.6
研究者用	単身	2	15,000	50.0	66.7	29.2
	夫婦	2	24,000	54.2	16.7	95.8
	家族	2	33,000	75.0	44.4	29.2

家族室については、2人シェア又は3人シェアを可能としている。

資料1：学長・理事表敬訪問及び学術交流

○5月10日 スリジャヤワルダナプラ大学（スリランカ）学長表敬訪問

学術・学生交流（特に理工学部）に関する意見交換のため、Senior Prof. Dr. Sampath Priyantha Perera Amaratunge 学長ほか3名が訪問。



○5月23日 ヴィタウタスマグヌス大学（リトアニア）学長表敬訪問

大学間学生交流に関する意見交換のため、Prof. Juozas Augutis 学長他2名が訪問。



○7月10日 国立中興大学（台湾）学長表敬訪問

研究者・学生交流に関する意見交換のため、Dr. Fuh-Sheng Shieu 学長他1名が訪問。



資料2：国際交流推進センター事業関連の海外出張・訪問

期間	行先（国）	訪問先	用件	出張者名
令和元年5月24日 ～5月28日	中国	四川錦江賓館、 成都市内	「日中大学フェア&フォーラム in CHINA 令和元年」出席、成都市視察	寺本 憲功 理事(センター長)
令和元年9月15日 ～9月17日	ベトナム	ハノイ外国語大学	SUSAP ハノイ外国語大学プログラム 参加学生の引率	山田 直子 准教授
令和元年12月12日 ～12月17日	マレーシア	マレーシア工科大学、 マレーシアブトラ大学、 タウン・フセイン・オン マレーシア大学 帝京マレーシア日本語学 院	佐賀大学ホームカミングデー in クアラルンプール	寺本 憲功 理事(センター長) 山田 直子 准教授 吉田 規雄 国際課長 山田 佳奈美 コーディネーター 木下 翔太郎 事務員
令和2年2月20日 ～2月22日	台湾	国立東華大学	SUSAP 台湾・東華大学プログラム参 加学生の引率	吉川 達 講師

資料3：令和元年度 留学生数

国・地域 Country・Area	学部等 Faculties	合計 Total	学部 Undergraduates												学部計 Total
			教育学部 Education		芸術地域 デザイン学部 Art and Regional Design		経済学部 Economics		医学部 Medicine		理工学部 Science and Engineering		農学部 Agriculture		
			国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	
計 Total		234	0		3		18		0		20		1		42
			0	0	0	3	0	18	0	0	0	20	0	1	
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal		1													0
中華人民共和国 People's Republic of China		86						13				2			15
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh		25													0
マレーシア Malaysia		18				1						14			15
インドネシア共和国 Republic of Indonesia		16										1			1
大韓民国 Republic of Korea		17				2		1				1		1	5
台湾 Taiwan		13													0
モンゴル国 Mongolia		1						1							1
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam		11						2							2
タイ王国 Kingdom of Thailand		7													0
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka		5													0
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia		2										1			1
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myammer		11						1							1
フランス共和国 French Republic		3													0
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany		1										1			1
フィンランド共和国 Republic of Finland		2													0
リトアニア共和国 Republic of Lithuania		3													0
カザフスタン共和国 Republic of Kazakhstan		1													0
オーストラリア Commonwealth of Australia		1													0
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt		1													0
チュニジア共和国 Republic of Tunisia		1													0
セネガル共和国 Republic of Senegal		1													0
アメリカ合衆国 United States of America		1													0
ベナン共和国 Republic of Benin		1													0
モザンビーク共和国 Republic of Mozambique		2													0
エチオピア連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Ethiopia		1													0
ガーナ共和国 Republic of Ghana		1													0
ルワンダ共和国 The Republic of Rwanda		1													0

(令元. 5. 1現在) As of May 1, 2019

大学院 Graduate Schools															大学院計 Total	研究生 科目等履修生 特別聴講学生 Research Part-Time Students Special Audit		鹿児島大学 大学院連合 農学研究所 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University		日本語・ 日本文化 研修生 Japanese Studies Students	その他 計 Total	国費・私費 計 Total		
修士課程 (博士前期) Master's Course										博士課程 Doctoral Course		博士後期 Doctoral Course		国費 National Expense		私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense				
地域デザイン研究科 Regional Design		医学系研究科 Medicine		先進健康科学研究科 Advanced Health Sciences		理工学研究科 Science and Engineering		工学系研究科 Science and Engineering		農学研究科 Agriculture		医学系研究科 Medicine										工学系研究科 Science and Engineering		
国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense					
25		0		1		8		17		11		4		44		110	71		10		1	82	37	197
1	24	0	0	1	0	1	7	8	9	2	9	2	2	17	27		1	70	3	7				
														0		1					1	0	1	
	21						3		3		1		2		16	46		25				25	0	86
								6		1		2		8	3	20		2	2	1		5	19	6
																0		2		1		3	0	18
						1		1			2			1	2	7		7		1		8	3	13
	1														2	3		9				9	0	17
										2						2		11				11	0	13
																0						0	0	1
	1								1		1				1	4		2		3		5	0	11
1							1		1					2	1	6		1				1	3	4
				1										1		2		1	1	1		3	3	2
								1								1						0	1	1
							2		2					4	1	9		1				1	4	7
															1	1		2				2	0	3
																0						0	0	1
																0		2				2	0	2
	1															1		1			1	2	1	2
																		1				1	0	1
																0		1				1	0	1
									1							1						0	0	1
														1		1						0	1	0
							1									1						0	0	1
																0		1				1	0	1
																	1					1	1	0
									1	1						2						0	1	1
										1						1						0	0	1
																1						0	0	1
									1							1						0	0	1

資料4：学術交流

(令2. 3. 31現在)

国名 Country	学術交流協定大学等 Partner Universities and Institutes	協定締結年月日 Since	
大学間 University		計73校	
大韓民国 Republic of Korea	全南大学校 Chonnam National University	平3. 3. 8 Mar. 8, 1991	
	安東大学校 Andong National University	平9. 12. 11 Dec. 11, 1997	
	国民大学校 Kookmin University	平11. 3. 29 Mar. 29, 1999	
	釜山大学校 Pusan National University	平12. 2. 2 Feb. 2, 2000	
	釜慶大学校 Pukyong National University	平14. 4. 18 Apr. 18, 2002	
	濟州大学校 Jeju National University	平14. 8. 9 Aug. 9, 2002	
	韓国技術教育大学 Korea University of Technology and Education	平14. 10. 8 Oct. 8, 2002	
	培材大学校 Pai Chai University	平18. 7. 11 Jul. 11, 2006	
	牧園大学校 Mokwon University	平19. 5. 16 May. 16, 2007	
	大邱大学校 Daegu University	平19. 6. 26 Jun. 26, 2007	
	中華人民共和國 People's Republic of China	華東師範大学 East China Normal University	平10. 5. 15 May. 15, 1998
		北京工業大学 Beijing University of Technology	平10. 12. 8 Dec. 8, 1998
		首都師範大学 Capital Normal University	平11. 4. 12 Apr. 12, 1999
中国農業大学 China Agricultural University		平12. 10. 17 Oct. 17, 2000	
遼寧師範大学 Liaoning Normal University		平13. 11. 6 Nov. 6, 2001	
ハルビン工業大学 Harbin Institute of Technology		平13. 11. 12 Nov. 12, 2001	
華東理工大学 East China University of Science and Technology		平15. 4. 1 Apr. 1, 2003	
浙江理工大学 Zhejiang Sci-Tech University		平16. 9. 6 Sep. 6, 2004	
西南政法大学 Southwest University of Political Science and Law		平19. 10. 31 Oct. 31, 2007	
浙江科技学院 Zhejiang University of Science and Technology		平19. 12. 25 Dec. 25, 2007	
遼寧大学 Liaoning University		平20. 4. 30 Apr. 30, 2008	
温州大学 Wenzhou University		平30. 5. 28 May. 28, 2018	
台湾 Republic of China, Taiwan		輔仁カトリック大学 Fujen Catholic University	平13. 8. 9 Aug. 9, 2001
		国立政治大学 National Chengchi University	平16. 9. 13 Sep. 13, 2004
		国立中興大学 National Chung Hsing University	平16. 9. 14 Sep. 14, 2004
	国立台北大学 National Taipei University	平17. 10. 6 Oct. 6, 2005	
	国立東華大学 National Dong Hwa University	平18. 6. 30 Jun. 30, 2006	
	元培科技大学 Yuanpei University	平19. 7. 6 Jul. 6, 2007	
	文藻外語大学 Wenzao Ursuline University of Language	平21. 9. 4 Sep. 4, 2009	
	国立勤益科技大学 National Chin-Yi University of Technology	令元. 6. 28 Jun. 28, 2019	

ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Vietnam	ベトナム国家農業大学 (旧ハノイ農業大学) Vietnam National University of Agriculture	平12. 12. 7 Dec. 7, 2000
	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 University of Languages and International Studies – Vietnam National University, Hanoi	平19. 8. 6 Aug. 6, 2007
	アンザン大学 An Giang University	平25. 3. 11 Mar. 11, 2013
	カントー大学 Can Tho University	平28. 8. 21 Aug. 21, 2016
	ベトナム国家大学ハノイ校経済大学 VNU University of Economics and Business	令元. 9. 24 Sep. 24, 2019
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia	プノンベン王立法経大学 Royal University of Law and Economics	平19. 8. 24 Aug. 24, 2007
	王立プノンベン大学 Royal University of Phnom Penh	平24. 11. 30 Nov. 30, 2012
ラオス人民民主共和国 Lao People's Democratic Republic	ラオス国立大学 National University of Laos	平22. 1. 26 Jan. 26, 2010
タイ王国 Kingdom of Thailand	カセサート大学 Kasetsart University	平8. 12. 6 Dec. 6, 1996
	コンケン大学 Khon Kaen University	平10. 9. 28 Sep. 28, 1998
	チェンマイ大学 Chiang Mai University	平17. 9. 9 Sep. 9, 2005
	モンクット王ラカバン工科大学 King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	平20. 1. 3 Jan. 3, 2008
	タマサート大学 Thammasat University	平25. 2. 13 Feb. 13, 2013
	インドネシア共和国 Republic of Indonesia	ハサスディン大学 Hasanuddin University
	ガジャマダ大学 Gadjah Mada University	平13. 11. 1 Nov. 1, 2001
	サムラツランギ大学 Sam Ratulangi University	平14. 9. 13 Sep. 13, 2002
	リアウイスラム大学 Islamic University of Riau	平15. 7. 2 Jul. 2, 2003
	スリビジャヤ大学 Sriwijaya University	平19. 6. 11 Jun. 11, 2007
	ダルマプルサダ大学 Darma Persada University	平21. 9. 4 Sep. 4, 2009
	セベラスマレット大学 Sebelas Maret University	平23. 3. 28 Mar. 28, 2011
	ジュアンダ大学 Djuanda University	平23. 7. 15 Jul. 15, 2011
	マラン国立大学 State University of Malang	平23. 12. 7 Dec. 7, 2011
	ボゴール農業大学 Bogor Agricultural University	平23. 12. 27 Dec. 27, 2011
	ブラウイジャヤ大学 University of Brawijaya	平26. 4. 14 Apr. 14, 2014
	スラバヤ工科大学 Sepuluh Nopember Institute of Technology	令元. 5. 21 May. 21, 2019
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	バングラデシュ工科大学 Bangladesh University of Engineering and Technology	平13. 4. 27 Apr. 27, 2001
	ジャハンギールナガル大学 Jahangirnagar University	平22. 7. 26 Jul. 26, 2010
	チッタゴン工科大学 Chittagong University of Engineering	平22. 9. 30 Sep. 30, 2010
	ダッカ工科大学 Dhaka University of Engineering and Technology	平25. 2. 20 Feb. 20, 2013
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka	ペラデニヤ大学 University of Peradeniya	平11. 11. 30 Nov. 30, 1999
フランス共和国 French Republic	ブルゴーニュ大学 L'Universite de Bourgogne	平15. 7. 1 Jul. 1, 2003
	オルレアン大学 L'Universite d'Orleans	平17. 3. 31 Mar. 31, 2005
	バイオ産業大学 School of Industrial Biology	平29. 11. 6 Nov. 6, 2017
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany	ブルク・ギービヒェンシュタイン芸術デザイン大学ハレ Burg Giebichenstein University of Art and Design Halle	平29. 3. 30 Mar. 30, 2017

オランダ王国 the Netherlands	デザインアカデミーアイントホーフェン Design Academy Eindhoven	平28. 10. 19 Oct. 19, 2016
フィンランド共和国 Republic of Finland	ユバスキュラ大学 University of Jyväskylä	平25. 11. 8 Nov. 8, 2013
ポーランド共和国 Republic of Poland	ルブリン工科大学 Lublin University of Technology	平18. 3. 3 Mar. 3, 2006
リトアニア共和国 Republic of Lithuania	ヴィタウタスマグヌス大学 Vytautas Magnus University	平25. 8. 26 Aug. 26, 2013
アメリカ合衆国 United States of America	パシフィック大学 Pacific University	平20. 2. 29 Feb. 29, 2008
	スリッパリーロック大学 Slippery Rock University	平24. 4. 4 Apr. 4, 2012
カナダ Canada	ウイルフリッド・ロリエ大学 Wilfrid Laurier University	平22. 7. 13 Jul. 13, 2010
オーストラリア連邦 Australia	ラトロープ大学 La Trobe University	平15. 7. 31 Jul. 31, 2003
	シドニー工科大学 University of Technology, Sydney	平24. 8. 28 Aug. 28, 2012

佐賀大学学術交流協定取扱要項

(平成31年1月22日制定)

(趣旨)

第1 この要項は、佐賀大学（以下「本学」という。）における学術交流協定（以下「協定」という。）の締結に関し必要な事項を定めるものとする。

(協定締結の目的)

第2 協定は、外国の優れた大学、研究所等（以下「大学等」という。）との交流を推進することにより、本学の研究及び教育の活性化を図ることを目的として締結する。

(協定の区分)

第3 協定は、大学間協定と部局間協定に区分する。

2 「大学間協定」とは、本学が外国の大学等と大学間交流を実施するため、相互の学長名により締結する協定をいう。

3 「部局間協定」とは、本学の部局が外国の大学等、又は関係する部局等と学術交流を実施するため、相互の部局長名により締結する協定をいう。

(協定の締結要件)

第4 大学間協定は、次の各号のいずれかに該当し、及び学長が必要と認めたときに締結することができる。

(1) 複数の部局で同一の大学等との交流実績があり、それぞれ同時に協定を締結しようとするとき。

(2) 既に一部局で交流実績があり、他の部局も交流しようとするとき。

(3) 既に交流実績のある部局又は部局間交流協定を締結している部局において、当該部局及び相手大学等の双方が、大学間協定を締結することを希望している場合で、かつ、相手大学等から要請があるとき。

(4) その他本学の国際交流戦略上、大学間協定を締結することが必要なとき。

2 部局間協定は、部局単位で既に交流が実施されている場合又は協定締結後の交流計画が具体化している場合で、かつ、部局長が必要と判断したときに締結することができる。

(協定書及び附属文書)

第5 第2に規定する協定締結の証として、協定書を作成するものとする。

2 前項の協定書には、協定による交流の大綱、具体的な交流の実施方法等を規定するものとする。

3 前項の規定にかかわらず、協定の具体的な交流の実施方法等については、協定書に代えて附属文書を作成し、規定することができる。

4 協定書及び附属文書（以下「協定書等」という。）は、原則として英語で作成するものとする。ただし、双方の合意がある場合は、双方の母国語で作成することができる。

(協定の有効期限)

第6 協定を締結又は更新しようとする場合は、協定書等に有効期限を規定するものとし、その期間は5年以内とする。

(協定書等の署名者及び発効日)

第7 大学間協定の署名者は、学長とする。ただし、附属文書の署名者は、研究・社会貢献担当理事が兼ねる副学長（以下「副学長」という。）とすることができる。

2 部局間協定の署名者は、部局長とする。ただし、学長又は副学長の連署を必要とする場合は、第8第2項に定める事前相談の際に、理由書を添付し、申し出るものとする。

3 協定書等の発効日は、双方の署名が完了した日とする。

(協定締結手続き)

第8 大学間協定を締結する場合は、協定締結を希望する部局の長から次に掲げる書類を添えて学長に申請するものとする。

- (1) 大学間交流協定締結申請書 (別紙様式第1号)
- (2) 協定書等の原案
- (3) 協定を締結する大学等の概要

2 前項に規定する場合において、協定締結を希望する部局の長は、事前に国際交流推進センター長に相談するものとし、国際交流推進センター長は、協定締結の意義等を確認するとともに、協定書原案について書類確認を行うものとする。

3 学長は、大学間協定の締結を承認した場合は、第1項に規定する部局の長に対し、書面で通知するものとする。

第9 部局間協定の締結は、次に掲げる書類により、当該部局において行うものとする。

- (1) 部局間交流協定締結調書 (別紙様式第2号)
- (2) 協定書等原案
- (3) 協定を締結する大学等の概要

2 第8第2項の規定は、部局間協定を締結する場合において準用する。

3 部局長は、部局間協定を締結した場合は、当該協定書等の写しを添えて速やかに学長に報告しなければならない。

(更新、内容変更及び終結)

第10 大学間協定又は部局間協定を更新又は内容を変更しようとする場合の手続きは、締結手続きに準ずるものとする。

2 部局間協定を終結した場合は、終結届を学長に提出する。

3 大学間協定を締結した場合は、特段の事情がある場合を除き、当該大学間協定を締結した大学等と現に締結している部局間協定は終結するものとする。

(協定書等の保管)

第11 協定書等の保管部局は、次の各号に掲げる区分に従い、当該各号に掲げるとおりとする。

- (1) 大学間協定 国際交流推進センター
- (2) 部局間協定 当該部局の担当事務部

(事務)

第12 協定に関する事務は、関係部局等の協力を得て、学術研究協力部国際課が行う。

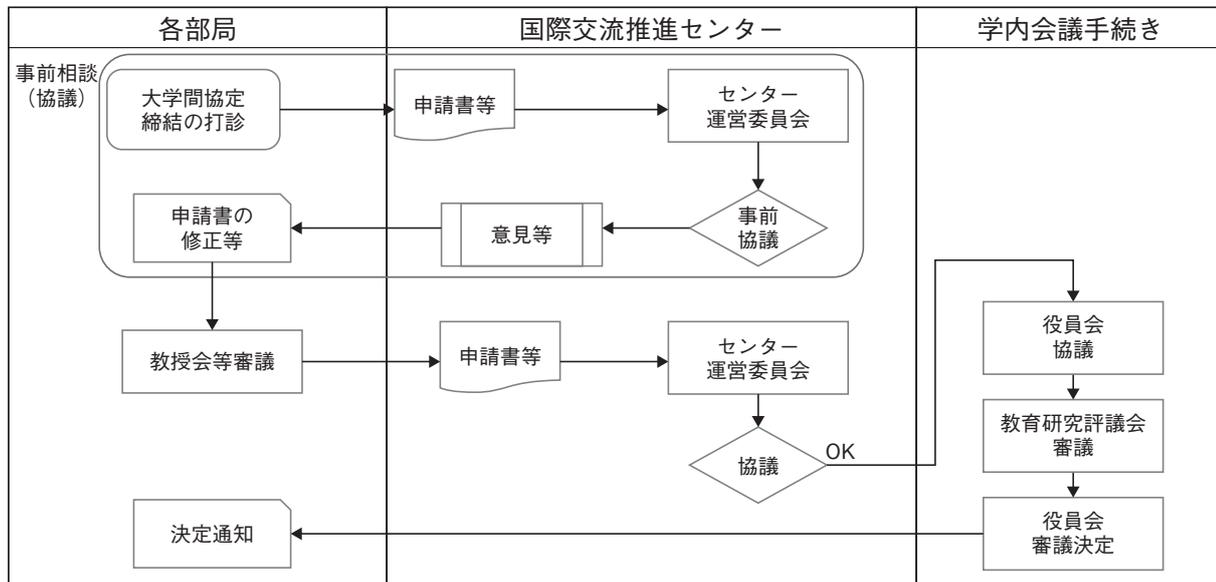
(雑則)

第13 この要項に定めるもののほか、協定に関し必要な事項については、国際交流推進センター運営委員会の議を経て、国際交流推進センター長が定める。

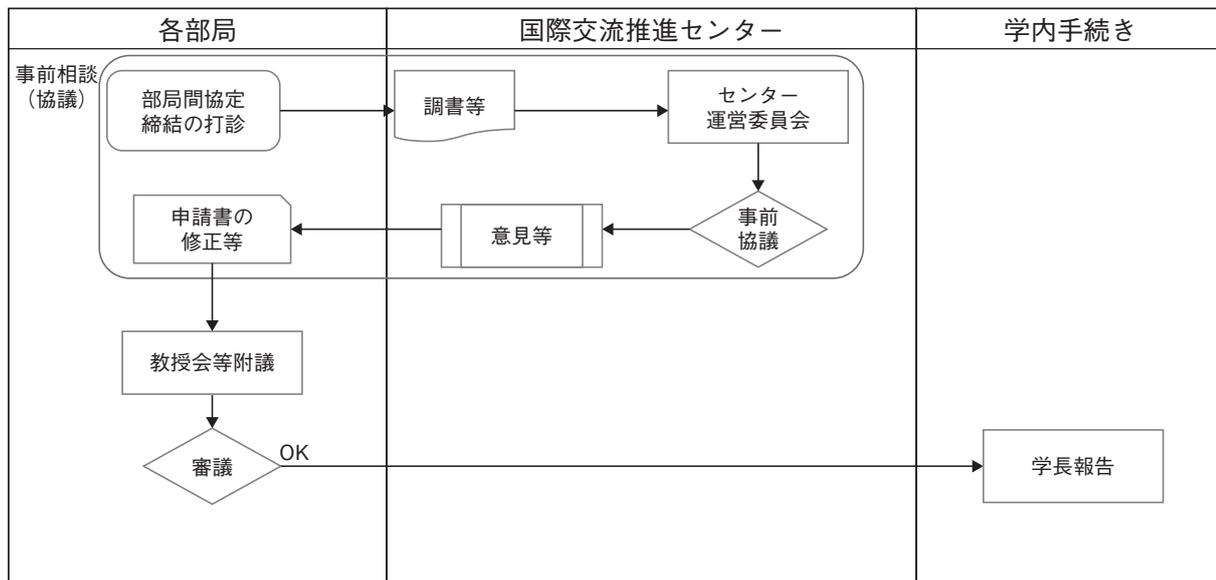
附 則

この要項は、平成31年1月22日から実施する。

大学間学術交流協定締結の手続きの流れ



部局間交流協定締結の手続きの流れ



資料5：令和元年度 国際交流推進センター関連行事

R元	佐賀大学の派遣・教育・支援	留学生に対する教育・支援	国際交流推進事業
(H31) 4月	23日 海外留学・国際交流フェア	2日 日本語コース・プレースメントテスト 4日 SPACE-E オリエンテーション 4日 新入留学生オリエンテーション 20日 新入留学生研修旅行 24日 留学生健康診断 27日 SPACE-E フィールドワーク (福岡市、太宰府市)	23日 第1回国際交流推進センター運営委員会
5月		15日 留学生対象の被爆体験講話 28日 消防訓練(楠葉寮・国際交流会館A・B)	10日 第2回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) 24日 日中大学フェア&フォーラム in CHINA 2019(中国：成都出張)(~28日) 29日 第3回国際交流推進センター運営委員会
6月	26日 香港中文大学サマープログラム (~7/5)	1日 SPACE-J・日研生フィールドワーク (唐津市) 2日 鹿島ガタリンピック	13日 第4回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) 28日 第5回国際交流推進センター運営委員会
7月	13日 危機管理オリエンテーション 13日、16日 世界とともに発展するSAGAN グローバル人材育成事業事前研修 19日 派遣交換留学成果報告会	13日 SPACE-E フィールドワーク(朝倉市)	
8月	7日 大邱大学校プログラム(韓国)(~24日) 12日 浙江科技学院プログラム(中国)(~26日) 14日 UM iCamp マラン大学プログラム (インドネシア)(~27日) 21日 ラトロープ大学プログラム (オーストラリア)(~9/28) 20日 世界とともに発展するSAGAN グロー バル人材育成事業帰国報告会・派遣留學 生壮行会	1日 栄の国まつり参加 (栄の国まつり振興会主催) 7日 交換留学生終了式 7日 グローバルリーダーシップ (唐津市、波戸岬)(~9日)	1日 第6回国際交流推進センター運営委員会
9月	15日 ハノイ国家大学外国語大学プログラム (ベトナム)(~29日)	27日 SPACE-E オリエンテーション	30日 第7回国際交流推進センター運営委員会
10月		4日 新入留学生オリエンテーション 12日 新入留学生研修旅行(波戸岬) 24日 留学生健康診断	2日 第8回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) 24日 佐賀地域留学生等交流推進協議会総会 (佐賀地域留学生等交流推進協議会主催) 25日 第9回国際交流推進センター運営委員会
11月		4日 さがを創る大交流会(さが地方創生人材 育成・活用推進協議会主催) 9日 多文化防災セミナー	8日 第10回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) 11日 国立大学法人等国際企画担当責任者連絡 協議会 12日 全国国立大学法人留学生センター長及び 留学生課長等合同会議
12月		4日 折り紙体験(日本文化研修) 14日 SPACE-E フィールドワーク (伊万里、有田町)	2日 第11回国際交流推進センター運営委員会 3日 第12回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) 12日 佐賀大学海外版ホームカミングデー in ク アランプルール・バトゥパハ(~17日) 24日 第13回国際交流推進センター運営委員会 27日 第14回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議)
1月	22日 危機管理オリエンテーション	17日 SPACE-E フィールドワーク(小城市) 22日 留学生対象就職支援講演会	29日 第15回国際交流推進センター運営委員会
2月	20日 東華大学プログラム(台湾)(~3/22) 21日 パシフィック大学プログラム (アメリカ)(~3/16)	19日 佐賀大学交換留学生終了式	27日 第16回国際交流推進センター運営委員会
3月	18日 世界とともに発展するSAGAN グロー バル人材育成事業帰国報告会		13日 第17回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) 27日 第18回国際交流推進センター運営委員会

資料6：国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則

国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則

(平成23年9月28日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年4月1日制定）第11条の7第2項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、佐賀大学の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流並びに外国人留学生及び海外留学を希望する学生に必要な教育を行うことを目的とする。

(業務)

第3条 前条に掲げる目的を達成するため、センターは次に掲げる業務を行う。

- (1) 国際交流事業の企画・実施に関すること。
- (2) 海外教育研究機関等との学生交流に関すること。
- (3) 海外教育研究機関等との学術研究交流に関すること。
- (4) 地域の国際連携に関すること。
- (5) その他本学の国際交流の推進に必要なこと。

2 前項の業務に関し必要な事項は、別に定める。

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 専任の教員
- (4) 国際マネージャー
- (5) 契約コーディネーター
- (6) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長は、理事のうち学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、本法人の国際交流事業をつかさどり、センターの職員を統督する。

3 センター長の任期は、当該理事の任期とし、再任を妨げない。

(副センター長)

第6条 副センター長は、本法人の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。

3 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、当該副センター長を指名したセンター長の任期を超えることができない。

4 副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(国際コーディネーター)

第7条 センターに、国際コーディネーターを置き、センターの専任教員のうちから、センター長が指名する者及び契約コーディネーターをもって充てる。

2 国際コーディネーターは、センター長及び副センター長を補佐し、センターの業務を横断的かつ包括的に処理する。

(契約コーディネーターの選考)

第8条 契約コーディネーターの選考は、第11条に定める運営委員会の議を経て、学長が行う。

第9条 削除

(国際マネージャー)

第10条 センターに、国際マネージャーを置き、学術研究協力部国際課長をもって充てる。

2 国際マネージャーは、国際コーディネーターと協働してセンターの業務を処理する。

(運営委員会)

第11条 センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 本法人の国際戦略に関する事項
- (2) 本法人の中期目標・中期計画のうち、国際交流の推進に関する事項
- (3) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (4) センターの専任教員の配置要望その他センターの人事に関する事項
- (5) 本法人の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項
- (6) センターの予算及び決算に関する事項
- (7) その他センターの管理運営に関する重要事項

(組織)

第12条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) 副センター長
 - (3) 各学系から選出された教員 各1人
 - (4) 学術研究協力部長
 - (5) 国際コーディネーター
 - (6) 国際マネージャー
 - (7) 日本語教育を担当するセンターの専任教員のうち、センター長が指名した者 1人
- 2 前項第3号に掲げる委員の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 3 第1項第3号に掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第13条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第14条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

- 2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の3分の2以上の賛成を必要とする。

(意見の聴取)

第15条 運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(審査会)

第16条 運営委員会に、国際交流事業の選考を行うため、審査会を置く。

- 2 審査会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第17条 センター及び運営委員会の事務は、各部局及び事務局関係各課の協力を得て、学術研究協力部国際課が行う。

(雑則)

第18条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。
- 2 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年5月18日制定）は、廃止する。
- 3 この規則施行後、最初に任命される第7条の副センター長及び第8条の鍋島サテライト長並びに第9条の室長及び部門長の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第9条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 4 この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に任命される第15条第1項第6号から第10号までの委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成24年3月28日改正）

- 1 この規則は、平成24年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行後最初に選出される第15条第1項第8号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成26年 3月26日改正）

この規則は、平成26年 4月 1日から施行する。

附 則（平成27年 3月26日改正）

この規則は、平成27年 4月 1日から施行する。

附 則（平成28年 3月25日改正）

この規則は、平成28年 4月 1日から施行する。

附 則（平成29年 3月22日改正）

この規則は、平成29年 4月 1日から施行する。

附 則（平成30年 3月28日改正）

この規則は、平成30年 4月 1日から施行する。

資料7：国際交流推進センター運営委員会名簿

（平成31年 4月 1日現在）

国際交流推進センター長	理 事	寺 本 憲 功
国際交流推進副センター長	（欠員）	（ 欠 員 ）
専任教員・国際コーディネーター	准教授	山 田 直 子
専任教員	准教授	古 賀 弘 毅
専任教員	准教授	布 尾 勝 一 郎
専任教員	講 師	吉 川 達
国際コーディネーター	契約コーディネーター	山 田 佳 奈 美
国際マネージャー	課 長	吉 田 規 雄

国際交流推進センター運営委員会委員

国際交流推進センター	センター長	理 事	寺 本 憲 功
	副センター長	（欠員）	（ 欠 員 ）
	国際コーディネーター	准教授	山 田 直 子
	専任教員（日本語教育担当）	准教授	布 尾 勝 一 郎
	国際コーディネーター	契約コーディネーター	山 田 佳 奈 美
	国際マネージャー	課 長	吉 田 規 雄
学術研究協力部	部 長	市 山 郁 生	
教育学系	教 授	早 瀬 博 範	
芸術学系	教 授	吉 住 磨 子	
経済学系	教 授	サーリヤ・ディ・シルバ	
医学系	教 授	青 木 洋 介	
理工学系	准教授	カーン・エムディ・タウヒド	
農学系	講 師	辻 田 忠 志	

大学情報

佐賀大学国際交流推進センター

Center for promotion of International Exchange Saga University

840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1 佐賀大学 国際交流推進センター

電話：0952-28-8203

Fax：0952-28-8819

<http://www.irdc.saga-u.ac.jp>

